

---

# クーゲルシュライバー！

織部鶉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クーゲルシュライバー！

### 【Nコード】

N2682Z

### 【作者名】

織部鶉

### 【あらすじ】

「これ……美靴のニーソックスだろ」  
落ちていたニーソックスを拾ったちよつと強烈な匂いフェチ男子  
”常葉 出水”は、それを落としたと主張する見覚えのない女子生徒  
徒に向かって言う。動揺する彼女は会話の果てに告白した。  
「わ、わたし……彼女の事が本気で好きなの！！」

男の人格を持ち合わせる彼女”綿峰 ちこり”は、同級生の女子  
に本気の恋をしてしまっていた！

友達の伝手や因果で手伝う事になってしまった出水は、ターゲットを部活動に取り込むために挑戦した事もないライトノベルを書く事になる。しかしそれをちこりに提案した途端、彼女の顔色は一気に怪しくなってしまう……

青春振投げ捨てラノベ書く？ クーゲルシュライバー！ 始まります

## ブローグ

## ブローグ

> i 3 6 8 1 5 — 2 8 8 3 <

「それだけは……絶対に嫌だっ!!」

教室というには設備がお粗末な旧校舎の一室で、突然彼女は机を叩いて立ち上がった。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモオタが読むものだっての……。それを作ったりしてる奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと言いたげにゴミを量産し続ける……。そんな職を目指す奴に至っては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才でゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ!!」

《綿峰 わたみね ちこり》は背中の中程まで伸びた髪をブワツと逆立たせ、怒りに歯を軋ませながら唸っている。まるで人が変わったようだった。

「お、落ち着けてちこ!」

そんな彼女の変貌に驚きつつ声を掛けてみるが

「っさい出水 いずみ!!」

張り上げられた怒声に、情けないながらも怖気づいてしまう。

初めて会ってからそれほど時間は経ってないが、俺の知る限りここりはこんな口調で話すような子ではなかった。もっと大人しいどころか、むしろ控えめ過ぎるとすら言える子だった。

「あれれ……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなあ……」

部屋の中央に四つの机と椅子が寄せられている中、1人だけロ―

ラー付きの回転椅子に座っていたツインテールの少女、《猫井<sup>ねこい</sup>こみみ》が不穏な声を口にする。彼女が椅子から降りると、その様子を鋭い目つきで見ていたちこりが顎を引いた。

そして、野良の子猫でも見ているかのような口調で言ってしまったのだ。

「……小っさ」

プチン、と何かが千切れた様な感覚が俺のところにも伝わってきた。

「ああん！？　今こみみのプチ切れランキングを1、2フィニッシュじゃがったなこんにゃろー！！　ラノベをバカにするのは単に良さが分かってないだけだろうけどね！　今！　こみみが小さいってのは！！　関係ないでしょうが　っ！！！！」

こみみは使っていた回転椅子の上にサッと飛び上がってから、内部にある支柱スプリングの力を利用してちこりに飛び掛かるうとする。

「んゝにあっ！？」

しかしどこにも悶<sup>つか</sup>えていないローラー付きの椅子を蹴って飛び上がれば、椅子だけが滑ってその場に落ちるのは誰でも判るはずだった。顎から落ちればさぞ痛いだろう。こみみはまさにその恰好で、床に打ち付けた顎をさすりながら目じりに涙を浮かべていた。

「ぎぎぎい……」

「……なんだよメスネコ」

今にも取っ組み合いが始まりそうな程に場は緊張していた。とても収拾が付きそうにない。

俺はどうすれば良いかひたすら考えあぐねていた。今二人の間に入っても、出来る事なんてたかが知れている。油を注いでとぼちちりを喰らうのはもっと勘弁して欲しい。

しかし俺は一人じゃなかった。机の向かいには、同じようにどうすれば良いのか悩んでいそうな表情をしている女子が座っていた。

「ち……ちよつと2人とも、ここには何のために来たのよ！　ちこ

も急にどうしたっていうの？」

彼女は意を決したのか、一度唾を飲んでからこう着しかけている二人に声を掛けた。

「ちっ……黙ってる五木。今お前には関係のない話だから」

ちこりはまったく顔に合わない声色と言葉で、場を収めようとした彼女を威圧した。

「な、なんですっ！……て、いやいや落ち着け私……」

黒髪をポニーテールにまとめ上げた彼女《五木<sup>いつき</sup> 一<sup>かずえ</sup>枝》は、頭を小刻みに振るって心を落ち着けようとしていた。一<sup>かずえ</sup>枝は入学以来、同じクラスである為か、ずっとちこりとの友人関係があつたらしい。それなら、彼女の豹変ぶりについて知っているかどうかはともかく、この場を収めてもらうには一<sup>かずえ</sup>枝の力を借りるしかなかった。

「と、とにかく、ちこは落ち着いて。こみみも理由ぐらいは聞いてあげようよ」

あくまで落ち着いた態度を示しながら二人を落ち着けようとするが、当人達は一切一枝に振り向きもせず睨み合う。

「あんたのお願いを叶えてあげるために集まってるんだよ！ 見損なつたよバカちこ！ バカちこ……！」

「ギヤーギヤーギヤーギヤー」とうるせーなメスネコ……！ 俺はな、単にラノベを馬鹿にしたいんじゃないやねえ。俺の経験を以って言ってるんだよ！ その辺のレビュアーと一緒に語んじゃないやねー！」

「だあかあルア……人の話聞けってんのよゴルアア……！」

いつのまに淑女な態度はどこへやら、一枝はその存在を流された末に、濁流の中へ飲み込まれてしまったようだ。まったく笑えない。

それから取っ組み合いのケンカに至るまでは数秒も掛からなかった。見た目はちゃんと女の子の子供の子している三人が、耳を塞がずには居られないような雑言を口にしながら、互いのセーラー服を引っ張り合っている。

その混戦の中から飛び出たちこりの一言だけが妙に俺の耳に残る。

「こらっ……俺に触んな!!」

俺　と自称する女子は居ない訳ではない。ただちこりの容姿・  
雰囲気に限っては明らかに違和感があった上、今までは”わたし”  
と弱い声で言っていたはずだ。これはやはり……そういう事な  
のだろうか？ いや、この際間違い無いはずだ。

「ちょっと待ってくれ」

俺はゆつくりと立ち上がったからキャットファイトの猛火立つ場  
所に近づくと、あえて神妙な声色を意識しながら呼びかけた。する  
と暴れていた三人は、ピタリと手を止めてこちらの方に向いた。  
俺自身はその反応を見越してやる程の策士ではなが、しかしながら  
このチャンスを逃す訳にはいかなかった。

「何よ出水」

一枝はジト目で俺を睨む。一瞬で匙を投げてしまった自分を見て  
ほしくないのか、どこか疎ましさを思わせる眼力を向けてくる。

「……なんなのイズミ」

不機嫌一色といった顔をしたこみみは、口を横長に伸ばしながら  
鼻にかかった声で言う。

そんな状況下でも確かめる必要があったのだ。この騒動のトリガ  
ーを引いてしまった者……綿峰　ちこりの正体を。

「ちこ」

「な、何だよ……」

一度肺に残った全ての空気を吐き出してからちこりに一歩近づく。  
そしてかすかに漂うチェリーっぽい香りを胸いっぱい吸いこんで  
から、俺は彼女との体の距離をグッと縮めた。迫りくる俺に対し彼  
女はとつさに手を構えてきたが、下段のガードは甘かったようだ。

「うりゃ」

「えっ」

無い

無い　　ない、無い無いッ！

俺は左手を背中に回して体を寄せ、右手をスカートの中へ一思いに手をつっ込んだ。

すぐに触れたのはやけに柔らかく滑らかな布地。おかしい……どれだけ擦つても、ここにあるはずの“棒”が無いのだ。

「あぐっ……！」

息を気管の途中で詰まらせたような声を漏らす彼女。俺はただただ不可解だった。ちこりの唐突な変貌、口調の変化……その原因はこう考えるしかないはずなのに。

「お前……女装した男じゃなかったのか？」

……どこからかカウベルの間抜けな音が聞こえた気がした。

そうだよ、変装した男じゃなきゃおかしいはずなんだ。初めて俺と会ったときだって、今に至る理由や目的だって、ちこりが女装をした男と考えれば全てつじつまが合う！それを立証するための一番確実な方法を、俺は今、正直に、確実に試しただけだ！

「ひっ……あう……」

ふと顔を上げると、彼……ではなく彼女の大きな目にじわつと涙が浮かんた。手をスカートの中に突っ込める距離なのだから、顔と顔は息遣いが届く間合いだ。少し目を逸らせば、ひくひくと動く鼻の動きまでハッキリ覗える。

俺が“棒”の探索を諦めて手を引くと、ちこりは崩れ落ちるようにしてその場に倒れた。さすがに、いきなり体に触れたらショックなのだろうか。でもちこついてる？と直接聞くよりはよっぽど健全だし、答える側のデリカシーは守られるし、その上でとっさの嘘をつく事が出来ない。

しかし、何で俺がわざわざ確かm



「どうばッ!!」

たった1フレーム、俺の視界に四本の鉄パイプ 椅子の足部分が見えた。

次の瞬間、物凄い衝撃が俺の顔面に訪れると共に、意識は肉体の外へと吹き飛ばされてしまった。

……ああ、走馬灯が見える。

> i 3 6 8 1 6 — 2 8 8 3 <

## 綿峰　ちこりの告白

### 《綿峰　ちこりの告白》

満開に咲く桜の美しさは、春の季節を迎えれば誰であれ感じられる。

ただほとんどの人は、その美しい瞬間でしか桜を見ようとしない。散ってしまった花弁が、雨に打たれ茶色く萎びる風景は、誰も記憶にとどめておこうとは思わないものだ。

うちの高校の校庭に植えられた200本以上の桜は、全国で見ても尋常じゃない咲き方をする。学校の敷地自体が東京都区内のど真ん中にあるにもかかわらず、今年のピーク時には《地上の雲》と称される桜の空撮写真と、花見をさせると校庭に都民がなだれ込んで来たという出来事がニュースで放映された程だ。

その桜も今となつては見向きもされぬ、もつさりと若緑の葉を纏った微妙な姿をしている。

落ちて腐った花弁は地面の土と合わさり、ずっしりと重くなっている。そんな場所に積み上げられている。正直、気持ちの良い光景ではない。

「……何でだろうなあ、こんな仕事を」

放課後。部活に飛び出す生徒たちをしり目に、俺は竹ぼうきを片手に校舎回りをトボトボと歩いていた。

校舎の隅に寄せられた花弁は、ゴミ袋にまとめて処理場に出さなければならぬ。その役目は必ず誰かがやる事になる訳だが、俺はこの仕事を今日まで五日間毎日やらされている。

苛められている訳じゃない。確かにクラスで少し変人扱いをされている節こそ有るが、理由はもつと単純　暇な奴、つまりは部活

動に入ってなければ、生徒として役員を務めている訳でもないからだ。

「ここまで来ると慣れたもんだな。よいしょっと」

この手際はそこらの用務員なんかに負けない、なんて一人で意地を張りながら集められたゴミを袋に詰め、それを校舎の壁を背に積み上げる。ノルマを済ませたらあとはひたすらゴミ置き場へと往復するだけ。時折空を仰ぎたくなる程に退屈な作業だ。

「げっ……この花卉、雨水吸ったまま乾いてねーぞ」

乾いた状態なら竹ぼうきを振るうだけで片は付くが、水を吸っていると話が変わる。地面にへばりついて簡単に取れないうえ、堆積したものに至っては溶け始めた雪の様に重い。

「スコップ先生を持ってくるしかないな。えーとどこかに掃除用具箱なかったっけ……」

クラス会で押し付けられるようにこの仕事を任された時、担任の男は「学校を覚える機会にもなる生徒会役員になる時もありだぞ」と励ましの言葉を送ってくれた。クソありがたい配慮だけど、俺が役員になることは事情により無理に等しい。信任投票ですら怪しいレベルだ。

その理由は俺自身にある。

自分にとっては普通の事であるが、他人には受け入れがたい行為と趣向らしい。それでも俺は改める気がないから、正直に生きていくにはこうして肅々と押し付け仕事をこなすしかないのだ。

憎らしい花卉どもを片付けれる正義の味方はどこに行ったか。たしか二日前使った時にはこの辺りにあったはず……と、まだ慣れない感覚に齒がゆい思いをしながら校舎を壁沿いに歩く。入学したての一年生にはこれだけで十分なストレスだ。

遠目にはコートの中で跳ねたり叫んだりしているハンドボールやテニス部員の姿が見え、後ろの方からは野球部員の不揃いで妙にグルーヴな掛け声が聞こえる。頭上からは吹奏楽部による野太くて艶

のある金管楽器の音が響いていた。まるで青春の一日一秒をこんな事に費やしている俺を囁し立てているようだ。それから逃れようとしたのか、あるいは本当にスコップのありかを思い出したのか。どっちとつかぬ歩調で辿りついたのは、校舎の北側に当たる湿った日陰の細道だった。

「そうだそうだ、確かこの辺に掃除用具箱が」

都の街と学校の敷地を仕切る壁と、四階建ての校舎に挟まれたこの辺りは、一日を通して日が当たらない為に地面がなかなかぬかるんでいる。当然、こんな暗い所に人通りなんて無いに等しい。そんな所でも掃除してしまおうと思ってしまう俺は、やはり暇人であった。

目的の掃除用具箱を探して心当たりのある所を歩く。他の生徒たちの声は遠ざかり、少し心が落ち着いた気がした。

そのおかげで、俺の能力はかなり鋭くなっていたようだ。

「あれ……っでもしかして」

> i37029—2883<

気配を感じた俺はとつさに辺りを見渡す。すると、コケのおかげでぬかるんでいない地面に布っぱい何かが落ちているのを見つけた。やけに縦に長い黒色の生地……普通の人間には一瞬で理解出来ないだろう。

だが俺には解る。その布に染みついた、芳しい匂いを感じ取ったが故に。

「……何でこんな所にニーソが落ちてるんだ」

布を手にとってみると確かにそれはニーソックスだった。ユニクロ製ではない。真つ黒と言うよりは少しだけ紺に近く、かの二枚組490円よりもさらに滑らかな肌触り。だらんとぶら下げてみると、指先や太ももにあたる部分には使用感のあるシワがはっきりと浮かんでいた。

「ほっ、なるほど」

一人でうんうんと頷いてから肺に残った息を全て吐き出す。

「たまらん、正直。」

使用済みのニーソックスを拾って興奮しない男がどこにいるのだろうか。使っていた人間が分からないなら尚の事良い。好き勝手に妄想すればこのニーソックスは何にでも昇華できる。

だがそれは一般人の話だ。俺はこの能力を以って凡人の向こう側、一歩先へと踏み出せる。

カサツ、という足音。

「あ、あの！ その……その靴しつ、それは……！」

> i 3 7 0 3 0 — 2 8 8 3 <

どもった女の子の声が聞こえてふと我に返る。どうやら俺は全神経を右手に持っているニーソックスへと向けていたらしい。そんな隙を見せていた所に、俺の獲物を横取りに来た女に呼び止められてしまったらしい。

「……こほん。えっと、何の用？」

「その、靴下というか、ニーソックスなんだけど……」

「ダメだ」

「えっ！ あの、それ、え！？」

ハイエナ対しては毅然とした態度が適切だ。少しでも気を許せばどこを噛まれて獲物を取られるか分かったものじゃない。

「いやその、それ……私のニーソ……」

その言葉に俺は顔を上げ、寄ってきたハイエナ　ではなく、面識のない女子生徒の顔をじっと覗きこんだ。

指定のセーラー服に青いリボン、どうやら同じ一年生らしい。威勢の弱い声や態度を現しているような薄緑の髪は背中の中程まで伸び、もみあげは三つ編みで結ばれている。切りそろえられた前髪の下には大きな目が二つ。口の輪郭は波打っており、なんとも分かりやすい慌て方をしていた。

俺はここに至ってようやく閃く。

「もしかして……これ、君の落し物なのか？」

「そ……うん！　そうそうなの！　それ私が、さっき二階からここに落としちゃって……」

「ふーん。でも今はちゃんとハイソックスを両方付けてるじゃないか」

視線を足元へ落とすと、彼女はこのニーソックスよりも幾分か濃い紺色をしたハイソックスを揃えていた。余分に持っていたニーソックスを落としたのかもしれないが、かといってこいつが“ハイエナ”であるかどうかの疑いが晴れた訳ではない。

「これはその……えと、わたしの替えなんです、そのニーソは」  
「へえ……」

まったく予想通りの回答。いいだろう、そうと来るなら確かめてやる。

「ちよつと失敬」

「あつ！？」

素早く息を吐き切ってから、俺は手に持っていたニーソックスを鼻に押し付け、穴の中へと吸い込まんとする勢いで匂いを嗅いだ。目の前の女子生徒は単なる驚きか、それとも生理的嫌悪か、強い反応の声を発したが今の俺には関係ない。

答えはこの布に染み込んでいる。

「この匂い……ん　はッ！？」

鼻腔の粘膜から電流の様なものが走り、全身を駆け巡る。

俺は単純に確かめようとしたのだ。匂いはその人が持つ個人の鍵のような物。このニーソの匂いを確かめ、彼女の靴下も拝借して確かめれば、俺は非礼を詫びニーソックスを返さなければならぬ。

その鍵を嗅ぎ分ける特殊能力が俺にはある。もっともそれは女性の体臭と限られているが……今はそれどころじゃない。

これは感じ取った匂いではなく、言葉で確かめなければならぬ。

「本当に君のニーソックスなの？」

「そ、それは……その……」

「……この匂い。君が本人でなければ、俺の知る友達のものとは思えない。もう一年以上会って無いから今何をしているか分からないが……よっぽどないとは思っけど、確かめるために君の名前を覚えてくれないか？」

「はえっ！？ う、うう……」

明らかな動揺。俺はその反応を見越していた。

“俺の知る友達”の姿は、今日の前にいる女子生徒とは見た目も雰囲気も違う。俺が中学二年生の時に転校して以来会ってないが、たった一年でここまで身長も顔も変わるはずはない。いくら女性の見目にはまったく興味が無いとはいえ、記憶力まで鈍った訳じゃない。

「本当の事を言ってくれないとどうにも出来ないぞ。別に警察や先生へ突き出したりはしないから名前くらいは教えてくれよ」

「ち、ちよつと待って！ 今どこかに突き出されて困るのはどう見てもあなたでしょ！ あああなたから先に名乗ってよ！」

彼女は顔を真っ赤にし、カミカミな口調で吠えてかかる。そろそろ決着のようだ。

「俺は一年A組の常葉 出水、ちよつとした匂い好きだ。どちらかが困るのだとしたいのなら、別に今から職員室に行っても良いんだぞ？ 俺の能力についてはもう一部の生徒や職員たちに知れ渡っている。この二ーソの履き主が別にいると証言することも出来るし、信用に足る立証は済んでいる」

「くっ……！」

「ほら、俺は名乗ったぞ。だから急に先生達へ突き出したりはしないから、名前を覚えてくれ」

慌てる態度を見る限りどうにもならなさそうなので、一旦落ち着かせるために声の調子を落とす。逃げられでもしたら面倒な事になりかねない。

「わ、わたしは…… B組の、綿峰 わたみね ちこり……」

判ってはいたが、その名前は俺の知る友人のものではない。同時

に本当のニーソックスの持ち主でないという事も確定したが、また別の問題が生まれてしまった。

「あれ？　じゃあ何であいつのニーソがこんな所に落ちてて、君が拾いに来たんだ？」

「それは……そ、そうです！　みくちゃんが落としたニーソをわたし拾いに来たんです！」

「さっきと言ってる事が違うじゃないか」

「うっ……！」

完全にボロは出切った。

だが彼女　ちこりはもう一人の名前を挙げた。その名前はまさ  
に……

「　“みくちゃん” って……まさか、澄川<sup>すみかわ</sup>　美靴<sup>みくつ</sup>の事か？」

「え、何であなたがその名前を？」

一瞬彼女の言っている事が信じられなかった。俺が転校して以来、彼女の動静は全く耳に入ってこなかった。ちこりの言っている事が本当なら、しばらく見ていない澄川　美靴本人が、この学校に居るという事になる。唯一俺の趣向を理解してくれる友達として、気にならない訳がなかった。

「ちよつとどこに行くんですか！」

身を翻した俺の腕をちこりがとっさに掴んで掛かる。

「何だよ綿峰」

「どこに行くのかって聞いてるんです！」

「中学の友達というか、幼馴染に会いに行くために理由が要るのかよ」

「え、幼っ　いや今はそうじゃなくて！　ちよつと待つて欲しいんです！」

引っ張る腕にあまり力が入っていなかったが、必死過ぎる大げさな身振りについ足を止めてしまう。

「安心しろ、このニーソはちゃんとみくに返すから」

「かか、勘弁してくださいー！」



「おまつ……もしかして」

ニーソックスは返して欲しいのに、持ち主である本人へ渡す事は拒む。つまる事それは

「……黙って持ち出してきたのか？」

「ああああああっ！ あっ！ あの！ ちょっとだけ、ちょっとだけさっきのあなたみたいに、みくちゃんの匂いを楽しもうと……！ それで窓際まで持ってきたら、つい手が滑って落としちゃって……」

「なんだお前もだったのか。その事情だと、確かにみくへ知れたら都合が悪いな」

「というかあなたも勝手に持っていくつもりだったんでしょ……？ だから、今このやり取りは無かった事にしょ？ ね？ その方がお互いの為になるし……」

「いいや。女の子同士ながら靴下の匂いを嗅ぐくらい、変人と思われる程度でさほど問題じゃないだろう。俺は命も名誉も青春も賭してこの匂いを求めていると言うのに」

「そこアピールするところなの！？ でも何だか負けた気がする……じゃなくて！ とにかくみくちゃんの所へ行くのは待つて欲しいの！」

必死過ぎるちこりに再び正面で向き直すと、彼女は掴んでいた腕を放してくれてから視線を地面へ落とした。散々叫んだ拳句落ち込んでいるらしい。

「……で、今は待つても俺はいずれみくに会いに行くぞ。同じ学校に居るつてのに挨拶もしないのは心地が悪いし」

「ダメなの！」

「ええ……？ 何で今日会ったばかりのお前にそんな命令をされないと」

「だって……だってわたしは……」

「おう、何だ」

「……聞いて、くれる？」

「だから聞いてんじゃん」

「幼馴染ならいろいろ知ってるんだよね？」

「まあな、幼稚園の頃から一緒だし」

「そんなに付き合い長いなら、私に協力してくれるよね？」

「当たり前だろ。小学校の時なんかみくがトラブル起こしたとき、代わりに俺が上級生にボコボコにされたくらい後ろに付いて周ってたくらいだ」

「あ、ありがとう！　なら私ちゃんと言うね……！」

「ちょおおおい待てよオ！！　今なんか変な事頼みやがらなかったか！？　お前とは初対面も良いところだろ！」

上手く気を逸らされたのか変な同意をしまった。ただそれで俺が死ぬわけじゃない。

ただ無視すればいいはずだったが、この女は続けて言い放ちやがったのだ。

「わたしは……みくちゃんの事が　本気で好きなんですっ……！」

## 五木 一枝の憂慮

### 《五木 一枝の憂慮》

……言ってしまった、つい勢いで……。

わたしこと綿峰 ちこりの気分は最高に複雑です。

確かにチャンスは手に入りました。けれども、今まで誰にも明かした事のなかったこの気持ち、よりによって拾ったニーソックスを嗅ぐような変態に教えてしまうなんて……。

それは昨日の出来事。わたしはいつものように、一年C組にいる大好きな澄川 美靴ちゃんを見るために教室を覗きました。一年生の教室は二階にA、B、Cと並んであるので、B組であるわたしが用無く覗いても別に怪しまれないのです。

女の子同士なのだから普通に会って友達から始めればいい……と同級生の子は言うのですが、恋人として意識している私にとっては超えられないハードルがありました。

だから、覗きに行っても話しかける訳じゃありません。ただ遠くからその可愛い後姿をじっと眺めているだけ。今の私にはこれが精いっぱい、なおかつそれで満足なのです。

五時間目の授業が終わってから帰りのHRまでの微妙に空いた時間。わたしの席の前に座っているポニーテールの女の子が、くるつと振り返ってから声を掛けて来ました。

「なーに変な顔してるの、ちこ」

「あ、一枝ちゃん」

決して明るくはなく、友達も多くないわたしにわざわざかまってくれる子。みくちゃんとの仲について相談に乗ってくれる頼もしい

人。それが今話しかけてくれた人“五木 一枝”ちゃんです。

「い、いやいやいやなんでもないですよ！」

「ふーん……ちこがはつきり否定するときは絶対何かがあるんだよね。もう一回質問してもいいの？」

「うう……」

この高校に入学してからずっと一人ぼっちだったわたしに、一枝ちゃんは今みたいな調子で話しかけてきてくれました。ちょっと押し気味だけど決して強引じゃない優しい声。返答に困ったりはするけれど、わたしにとってはそれがちょうど良いみたいです。

「それが、みくちゃんの事なんだけど」

「澄川さんと進展あったの？」

彼女はわたしが『みくちゃんと友達になりたがっている』と純粋に思ってる。それで間違いはないんだけど、実際はもつと別の次元。恋という普通の感覚を超えたもの。

唯一と言える友達の一枝ちゃんには、女の子が好きと告白して嫌われたくない。変な奴と思われたくないから、あくまで建前を挟んだ上で以前から相談していました。

「進展と言うか……協力してくれる人が増えたの。昨日放課後に……」

「ああそうそう、昨日はごめんね。姿が見えなかったから私一人で帰っちゃったけど」

「わ、わたしこそごめんね！ ちょうどその時、協力してくれる人と会ってたから……」

「そうなんだ。で、どんな人なの？」

一枝ちゃんは体をこちらに向けて、まったく疑いのない目でわたしの顔を覗きこんできます。

……間違っても『みくちゃんの姿を覗きに行ったら教室には誰もいなかった。でも彼女の机の上に使用済みらしきニーソックスが置いてあったから、ちゃんと返すつもりで拝借して窓際で匂いを嗅ぐうとしたら外に落としちゃった。それで私と同じ目的でニーソックス

スを拾った男子がみくちゃんの幼馴染と知ったから、わたしの方から無理矢理協力をお願いした』だなんてし正直に言えるわけがない。言った日にはもうお嫁に行けない。

「えーと……そ、そう！ 同級生の男子なんだけど、みくちゃんと幼馴染でいろいろ話を知っているみたいなの」

「へー、男の人ね……」

なぜか一枝ちゃんが声のトーンを一つ落とした。何か地雷ふんじやった？

汗がひよひよと滲むほどに緊張する。どうか変に感づかれないように……。

「何ていう名前の人？ 分かるかもしれない」

出水くんにも協力してもらうなら隠し通す事なんてできないし、それよりも一枝ちゃんに嘘ばかり付きたくなかった。たぶん、名前くらいなら大丈夫だよ。変な噂を聞いていたとしても、まず誤解を解くところから始めればきっと一枝ちゃんも受け入れてくれるはず。

「一年A組の常葉 とみわ 出水 いずみ くんって人」

その名前を口にした瞬間、何故か周りにいた数人の生徒までもが身を強張らせたような気がしました。そして言葉を向けた一枝ちゃんに至っては、まばたきもしないまま顔を硬直させてる。率直に、銅像になっちゃったかと思う程動きません。

「か、一枝ちゃん？」

「……………」

ふと右隣にいた女子生徒たちの声が耳に入ってきました。

「やだ、あの変態また何かしたの？」

「最近はずかしくて聞いたのにただ潜伏してただけみたいだね……」言葉に出さないクラスメイト達も一様に不穏な顔色をしていました。正直彼の事は全く知らないから、まるで私だけが取り残されて

いるような空気に。

「あの……一枝ちゃん？」

「……う」

「う？」

第六感が体内にビリビリと電流を発生させている感覚がしました。次の瞬間、一枝ちゃんはわたしの両肩をとつさに掴んでから大口を開きました。

「うわあああああああ！！」

「なっとな何！？」

「ダメ！ゼツタイ！」

「え、えっ？」

「あいつだけはダメ！絶対に絶対にずえーったいに ああもう やだやだやだ名前を聞くだけで生理不順になりそう……」

「どうしたの急に……」

「ここは知らないの？ 常葉 出水の変態さを」

そこに関しては知っていると即答出来るはずでした。ただし建前を考えて

「まあ……確かにちよつと変わってるとは思うけど」

「ちよつとどころじゃないって。いい？ あいつは」

「帰りのHRはじめますよ」

一枝ちゃんが何かを説こうとしていた所に、女性の担任がHRのため教室に入ってきました。彼女は一度大きく深呼吸をしてから「また後で」と言っただけに向き直します。

わたしは突然の大声に驚いて肩をすばめた姿勢のまま“黒いアレ”を片手に持って話す先生の姿を見ていました。

「昨日通知した通り、今日で部活動の新人部員勧誘活動は終わりよ。ただ部活動への入部や新設に関しては何時でも可能だから、その際は代表者と部員を揃えた上で先生に相談してね。それと、よく先生たちに無理を言う子がいるけど、新設に関しては手続き以外一切手

を貸しませんからね」

ここ《物語高校》<sup>ものがたり</sup>は、東京都新宿区にある私立高校。表面的には生徒の数がちよつと多いだけの高校だけど、実際にはもう一つの特徴があります。

「決して意地悪じゃないからね。先生たちも忙しいし、少しひいきをしたらこの学校全体に迷惑をかける事となるわ。うちの高校は特にそのバランスに気を使うからね」

それは部活動がいろんな方向に盛んな事。普通の部活動はもちろんあるけど、それ以外にちゃんとした部員と公的な活動目標があるならどんな内容でも部活を新設出来る。部室がもらえるし部費も出る。何か目的のある人にとっては、ものすごく特別なシステムであるとはわたしも思うところです。

「では以上で今日のHRも終わり。みなさんこの後もがんばってください（・・・・・・・・・・・・・・・・）」

先生の挨拶はいつも通りです。

普通だったなら「気を付けて帰ってね」とかだけど、物語高校の生徒はほとんど部活動に入っています。しかも活動続ける為にみんな必死だから、先生の挨拶はこの場において一番自然なのです。

当然部活をしていない生徒を蔑ろにしている訳じゃないとは思いますが。でもどこにも所属していない生徒に対しては、やっぱり村八分にされているような風潮がある気はしたのです。

「それで……何の話だったっけ？」

わたしは特にやりたい事もなかったから部活動に入らなかったただけだけど、一校ちゃんとは別に用事があるから所属しなかったと言っていました。そんなわたしたちは村八分同士、自然と一緒に下校するのが習慣になったのです。

「あーそうだった……思い出したくなくてここに言うべき事も忘れてたよ」

それぞれの場所へと走る生徒たちを横目に、わたしと一枝ちゃんは廊下を歩いて生徒玄関に向かっていました。

「えっと……何があつたの？」

「あつたも何も　はあ……ちこ、身体検査の時に休んでたでしょ」  
「そういえばそうだったかも」

四月の中旬に新入生対象の身体検査を一齐に行ったらしいけど、わたしはその時体調を崩していて、治った後に一人だけで検査してもらった。だから正直、あまり記憶に残るような出来事じゃありませんでした。

「その時にあいつがやらかしたのよ。……この際単刀直入に言うわ。常葉　出水はね、尋常なレベルじゃない匂いフェチなの」

……それも知ってる

「それだけならまだ許せたわ。でもあいつ、私が教室に置きっぱなしだった下のジャージと、そ……その、替えのパンツを……手に取ったその場で思い切り嗅いだのよ！」

あれー……出水くん以外にそんなような事やりかけた人、昨日見た気がする……。

「信じられないでしょ！　人の鞆をあさった所から完全にアウトなのに……いや、今思えばそれだけなら全然許せたわ」

「え？」

「現場に遭遇した私は柄にもなく悲鳴を上げたわ。自分のパンツを思い切り鼻に押し当てられてる光景を見たら無理もないでしょ」

わたしだったら気絶するかな……。

「それで、叫び声を聞きつけたクラスメイトたちが一齐に戻ってきたの。それで全員が出水の方を見るわけ。ここであいつが観念して土下座でもすれば良かったのに……」

一枝ちゃんとはしばらくの間を置いてから、少し鼻息を荒くしつつ言いました。

「あいつは……あいつは、私のパンツを片手に持って「これちゃんと洗ったか？　少し匂いが残ってるぞ」……って言ったのよ。それ



も、クラスメイトの男子女子がほとんど居合せているような所で…

…！ 何の臆面もなく……！！」

「ご愁傷様としか……いや、さすがにそれは出水くんが悪いです。

「それで一週間の停学。処罰の軽さには納得してないけど、少年院にでも送られたら私の心地が悪いから一応それで納得した。前から女子の衣類を勝手に嗅ぐような異常行動を繰り返していたみたいだけど、それ以来奴は完全に変態扱い。その上でいつもニコニコしているから気味が悪いわ。ああいう顔なんだろうけど……」

確かに、一枝ちゃんから聞く分には擁護する気にもなれないとは思うけど……それでも私には、みくちゃんへ近づくために彼の力が必要なのです。

「でもさ、わたしは……」

「いい？ とにかくここは絶対にあいつへ近づかない事！ 同類に見られたら一生澄川さんと友達になれないよ！」

「それなんだけど、出水くんとみくちゃんは中学生の時から仲の良い友達で……」

「いやいやいや、どうせちこと仲良くなりたいたいが為の出まかせよ。

何か証拠でも出したの？」

わたしが勝手にみくちゃんのニーソックスを取った事を、匂いを嗅いだけで判別した……だなんて言えるわけがない。今はとりあえず話を逸らせるものが

「あ、ちこにずっとちゃん。よつす」

今一番現われちゃいけない様な人が来てしまいました。

「……どの面さげて私をあだ名呼ばりしてんのよ出水。そもそもそのあだ名は嫌なのに」

生徒玄関で鉢合わせた出水さんは、まるで友達に話しかけるかのような口調と笑顔で、一枝ちゃんをあだ名で呼びました。さっきまでの話からは少し想像しにくい光景です。

「そう言えばちょうど良いところに出くわしたわね出水」

「え？ 何か良いことあった？」

「とんでもない……あんた関係で良い事なんて一つもないからね」

「俺はあるけどなあ。今日もずっちゃん良い匂いだし」

「……まったく反省していないようね。とにかく話は全部ここから聞いたわ。その上で、今後一切この子には近づかない事。いいわね？」

「もしかして昨日の事？ うーん……でも俺は頼まれた側だし」

「それはちこがあんたの事について知らなかっただけ！ わかった？ じゃあ帰るよちこ！」

「わあちよつと待って一枝ちゃん！」

一枝ちゃんが私の右手を引っ張り、さっさと靴を履いて外に出るよう促します。流されるままの私は下手に反抗も出来ませんでした。

「あれ？ 一枝ちゃん今日はこっちから帰るの？」

「ううん、単純にちこが心配なだけ。何となく予感がするの」

家までの帰り道。私の家は山手線に乗って2駅先にあるマンション。対して一枝ちゃんは、学校から歩いて10分くらいの場所にあります。それなのに彼女はわたしの後ろにぴったりついてきます。一枝ちゃんが切符買うのを待ったり、いつも車両を待つ所より遠い場所から電車に乗ったり、いつも通りに話をしたり。わたしは単純に、ちよつとだけ違う下校の風景を楽しんでいただけでした。

目的の駅で降りてから改札を通り、構外へと出ようとしたあたり。そこで一枝ちゃんは突然振り返り、呼びかけるような声でこう言いました。

「なあんであんたがついて来てるわけ……？」

そこでわたしはようやく、出水くんが後ろに付けてきた事を知りました。彼は相変わらず細目をアーチ状に、ニコニコとした表情でこちらに近づいてきます。

「それ以上近づくな！」

「何だよっちゃん」

「それはこっちのセリフよ。ストーカーまでするのなら、今度は本当に警察へ突き出すよ」

「俺の家もこっちだし」

「はあ？ また言い訳？」

「うちに上がって確かめても良いよ」

彼は至って普通に答えてます。内心が読めてるって訳じゃないけど、少なくとも疑えるような格好ではありませんでした。

「……はいはい、分かったわ。分かったら付いてこないで。お願いだから私の……」

「生理が何とか？」

「消える……！」

出水くんの家は私のマンションからそう遠くありませんでした。

直線の道で、おおそ50メートルぐらい手前にある小さなアパートが出水くんの家だそうです。

彼はにこやかにさよならの挨拶をしてきたけど、わたしはキリキリと態度が落ち着かない一枝ちゃんを思っ何も返しませんでした。

「ちこ、さっき見た通りあいつの家はすぐ近いわ。ちこのマンションを特定されたり、登下校の時に遭遇しないように気を付けてね」

「あ……うん、わかった」

「じゃあ私は帰るから。……気を付けてね」

「大丈夫だよ、たぶん」

マンションの入り口で、一枝ちゃんはわたしの両手を握りながら目力を交えつつ言いました。

彼女もまた偽りなくわたしを心配してくれている。なまじそれが伝わるだけに、わたしは複雑な気持ちを抱えながらエレベーターの中へ入って行きました。

## 猫井こみみの提案

### 《猫井 こみみの提案》

「……………んお、何だこれ」

1年A組の教室。机の中に手を突っ込み授業で使うプリントを探している、妙に懐かしいものが出てきた。緑色の罫線が引かれた紙面には書きかけの文字がある。

「反省文、一年A組 常葉 出水……………ああこれか」

もう一度奥の方へ手を伸ばしてみると、まだビニールの封も開かれていない原稿用紙がゴロゴロ出てきた。

そう言えば一枝の匂いを思わず堪能していた時に、事が大きくなって謹慎処分を与えられて、その時に書かされたんだっけか。たった2枚の反省文を書くのにずいぶん苦労した事を今でも覚えている。その意味では非常に懲りたから、反省文ってやっぱり意味はあるんだな。

「よつ、出水」

名前を呼ばれ咄嗟に顔を上げる。俺の目の前にいたのは、薄い水色の髪をツインテールに結んだ小柄な女子生徒だった。

「どうしたこみみ」

彼女の名前は猫井<sup>ねい</sup> こみみ。同じクラスで唯一俺に話しかけてくる、ある意味頭のネジが一つ飛んだオタク女だ。

「これ私がさっきまで穿いてたパンツ、いる？」

彼女は右手に丸めて持っていた青色の横縞パンツを机に置いた。

「……………こつお誂え向きに差し出されると困るんだけど」

「やっぱそういうもの？ 見えると判ってるパンチラもそうだけどねえ」

そつという話じゃないし

あ……………

俺は自分の性癖に素直すぎるせいなのか社会的に非常に不味い事をしてしまったらしく、一枝のように女子生徒から近づかれる事はない。俺が見ていないだけで、物語高校の裏サイト辺りでは死ねだの殺すだの言われてるかもしれない。

それでも俺は困らない。不良にとつちめられている訳じゃないから、普段はおとなしくしているだけで良い。

しかし唯一、こみみだけは臆面もなく話しかけてきて、なおかつ毎度の事妙な振りをしてくる。嫌いという訳ではないが調子を狂わされてしまうのだ。

「冷めちゃうよ?」

「ん……じゃあちよつと失敬」

いくら匂い好きの俺だってモノの選り好み位はする。当然嫌いな女性の匂いだつてある。ただ一枝のように目がくらむほど良い匂いだと、かのような問題に発展するほど我を失う事はある。

「ん……………」

非常にやりづらい。今はまだ午前中、授業と授業の合間。他のクラスメイト達はほとんど教室に残っている。そんな状況で、差し出されたパンツを嗅ぐなんて。

「どう、どう?」

「何だこれ……洗剤にしてはキツすぎる匂いしかないし、これ太ももに敷いて温めてたذار」

「すっげーそこまで判るんだ! さすが出水、ご褒美として今こみみが穿いてるパンツをここで……」

「いやいいよ、俺がいろいろ面倒なことになる」

「そんな遠慮せず」

「いいつつてんだろ!」

こんな調子で時たま俺を弄りに来る。匂いはともかく、どこまで本気か解らないのが手におえない。

「それにしても何で判ったかなあ。このパンツ、雑誌の付録なんだよ」

「今の時代は本にパンツが付いてんのか……？」

「正確にはパンツに本が付いてるような値段だけどね。アキバだねえ、冷やしパンツも売ってるんだよ！」

……頭痛くなってきた。こいつが居ると感覚が狂う。

「そっぴゃこの前貸した漫画とラノベ読んだ？」

「貸したんじゃないくて押し付けたもんだろ。一応暇つぶしに全部読んだけど」

「どうだった!？」

こみみは目を輝かせながら顔を近づける。俺は少し後ずさりしながら答えようとすると、横耳にざわざわとクラスメイト達のひそひそ声が聞こえた。

「おい……あんまり俺と居ると、変に噂されて良い事ないぞ」

あまりに親しくされてしまうと、逆に俺は責任を感じてしまう。

それでもこみみはニコニコした表情を変えないまま答えた。

「こみみは最初からこみみだし、別に誰だからって態度は変えないからね。たとえオープンオタクでも挨拶さえ出来れば受け入れられるものなんだから。一番ダメなのは「構ってほしくないし!」とか強がってる隠れオタクの方! ああ言うの見てるとイライラするんだよね」

「……そういう人も事情つてもんがあるんだろ、色々」

「その点出水は自分の欲望に素直だから、こみみの中じゃポイント高いよ」

「はいはいそうですか」

それから適当に借りた漫画とかの話をした。以前からそういう趣味がある訳ではなかったが、家での時間が有り余っている俺にとつて、こみみが押し付けてきた書籍の数々はいい暇つぶしになった。帰ってすることと言えば料理や宿題、臭い妹が汚したものの洗濯、それが終わればゴロゴロしているだけ。読み切れないと思っていた本の束はあつという間に崩れた。

「うんうん、出水は偏ってるけど良い趣味してるよ」

「褒めてるのが貶してるのか……」

「もちろんG」の方だよ。今度は女性向けのも読んでみる？」

「女性向けっておま いや、お前って……」

俺はこの時まで重要な事を忘れていた。

こみみってそう言えば女だった。確かに女性の匂いはあるが、薄いと言うか何と言うか……中和されたような感じがして、その意味では女らしくない。見た目よりも先に匂いで性別を判断する俺からしたら、こいつは重ねて相手にしづらい奴だ。

「こみみがどうしたの？」

「その……うん。お前にしていい質問かどうかは分からないけど、聞いてくれるか？」

「もしかして、B組のちこりん（……）に頼み込まれて他の女の子との仲を取り持つてほしい、って頼まれた事？」

言葉を返す前にまず自分に訊ねてみた。

俺、こいつにその事いった話したっけ？

「ああ、こみみがなんで知ってるかって？ そりゃあれだよ出水。」

“小耳<sup>こみみ</sup>にはさんだ” ってやつだよ！

> i 3 7 3 6 3 — 2 8 8 3 <

童顔にしたり顔ってこうもウザいのか。

「……挟めるほど大きくなってから言えっての」

「あーんですってえ！？」

「ぐえっ！ 痛い痛い」

彼女は自分のルックスや振る舞いに自信を持ってるくせに、体が小さい事を指摘するとやけに怒り散らす。今みたいにスイッチが入れば、周りの目を見ずに思い切り俺の頬をつまんで引っ張る。

「悪かったってば！ 一応大事な話なんだ。ちよつと廊下に出てくれ」

「ふえ？」

教室を出るときもひそひそ声を向けられていたような感じがしたが、もうこみみと居る時でもいちいち気にしない。厄介さで言ったら彼女の方が断然上だ。

もう数分で授業が始まるという事もあり、廊下には人影もまばらだった。俺は一度心を落ち着かせてから質問に入る。

「何で俺とちこの事について知ってるかってのは深追いしない。その代りお前に、女の子として相談に乗ってほしいんだよ」

「もしかしてちこりんとくつつきたいの？」

いちいちこみみの質問に答えていると前に進まないの

「俺が“ちこ”と“みく”の仲を取り持つため協力する事になったのは、多分お前が知ってる通りだ。でも俺から何をすれば良いのか正直分からないから……その、お前だったら、何をしたら仲良くなるきっかけになると思う？」

「そんなに難しく考える事かなあ。だって出水と、ターゲットの澄川 美靴ちゃんは幼馴染なんですよ？ 君が直接、彼女から情報を聞き出してちことこみみに教えれば良いんじゃないの」

「何でお前が勘定に入ってるかは置いて……俺は俺なりに考えたんだよ。みくは昔からフツの女子で、それは今でも変わってないと思う。それなのに俺と関係がある事が学校に広まったら、きつとあいつの迷惑になるに決まってる」

「なるほどー確かに出水みたいな変態と幼馴染、なんてふれ込みが広まったら大変かもね」

「……何故かお前に言われるとム力つくな。とにかく俺は、なるべくみくに関わらないようにしつつ協力したいんだ。で、何か案は無いかな？」

こみみは少し考えるような格好をしてから短く問い返してきた。

「1つだけ確認。出水は幼馴染のみくちゃんに会いたくないの？」

「そ……それは……」

会いたくない訳がない。みくは俺の趣味を理解してくれる数少ない友達の1人だ。普通に会って、久しぶりと言って、1年の空白を



埋められるくらいにどうでもいい話をしたい。でもそれ以上に

彼女へ迷惑はかけたくない。

「じゃあもう1つだけ質問。会いたいには会いたいんだけど、自分からは会えないから、ちこりに協力するっていう間接的な手段を取ってまでみくちゃんに関わりたいんだ？」

「う……」

こいつの目は本当に2つだけなのだろうか。そう思うくらいに心を見透かされているような気がする。

「出水の考えてることは大体わかった。こみみが何とかしてしんぜよう」

「ほ、本当か!？」

「うん、良い作戦があるよ。ただし条件が1つだけあるの」

それは？ と無言で訊ねる視線を送ると、こみみは先ほどとは違って見えるしたり顔を浮かばせながら答えた。

「こみに質問しないこと、いい？」

## 綿峰　ちこりの挑戦

### 《綿峰　ちこりの挑戦》

「それではその……よろしくお願い、します……」

「うーんと、こちら……こそ？」

俺は玄関で立ち尽くした。

目の前には綿峰　ちこりが、カーペットに膝を揃えて頭を下げている。まるで新婚夫婦のお出迎え……と連想するのは思考が古いだろうか。とにかくやりづらい。

「それではどうぞ」

ちこりはスチャツと指先を揃え、通路の奥を指し示す。俺は両手の荷物を一旦置いてから靴を揃え、無駄に足音を立てないよう気を付けつつ後ろについて行った。

「うおっ……なんだこの豪華仕様は」

マンションそのものの建構えから想像はしていたが、ちこりの部屋　というか家は、予想を遥かに超すレベルで凄かった。何をどう間違えたら、同じ高校のクラスメイトがこんな豪邸で1人暮らし出来るのか……自分の住んでいるアパートと重ねてみると現実を疑いたくなる。

「とりあえずソファにかけて。紅茶入れるから」

「お、おう……」

言われるがままに綺麗な青色が複雑に編み込まれているソファに腰を折る。冬の冷たい便座に腰かける時の様にゆっくりと。

部屋の中心から周りを見渡してみると、尚のこと広さが如実に覗える。南側の窓……と言うよりはガラスで出来た壁というのか。こんなの洋画でしか見たことがない。傾き始めた太陽の光がその窓からたっぷり入り込むため、灯り無しにも部屋の中はかなり明るい。

「はいどうぞ」

「さ、さんきゅ」

真っ白いティーカップ。本当に純白なものだから、高いのか安いのか判らない。妙に恐ろしくなつて持ち手が震える。

「そそそれでさ、ちこ」

「はい？」

「えと……俺が礼を言うのも変な気がするが、入れてくれてありがとうな」

「いいえこちらこそ。わたしの無理なお願いを聞いてくれたのですし、こちらも精いっぱい協力するのが筋というものです」

こみみとの約束が交わされたのはおおよそ6時間前。ちこりと美靴の仲を取り持ったための作戦は当日中に発動した。その第1弾が今という訳だ。

「それでその……猫井さんが言う作戦ってどういうものなんですか？」

ちこりとこみみは直接の面識こそないらしいが、経緯のおおよそは話している。まだ伝えていないのは、今から話す作戦内容だけだ。「難しい事じゃない。明日の昼飯になるお弁当を作って、美靴に食べさせればいいんだ」

「へえー……へえっ!？」

ちこりは小首をかしげてから大きく目を見開いた。今の内なら驚くのも無理はない。

「こみみが言うには、相手の心へ踏み入るには食事中が一番らしい。手作り弁当なら効果は倍掛け、友達になるなんて余裕らしい」

「でもでも、わたし料理なんてした事ないし……」

「その為に俺がここへ派遣されたんだよ。こみみは身内の手伝いとか言つて来れないから、食材とかは俺が全部揃えた。この通り」

そう言いながら肉や野菜がどっさり入った買い物袋をテーブルの上に置く。彼女は袋を覗き込んでから「おー……」と息を漏らし、またソファへと座りなおす。

「出水くんが作ってくれるのです？」

「バカ、俺が作ったら意味ないだろ。俺は自分のを作る片手間に、お前の手料理を手伝うだけ。これもこみみの指定だ。日が暮れる前にとっとと作るうぜ」

「えっ、ええっと……」

俺がただっ広いキッチンに食材を運んでいる間にも、ちこりはぐずるような声を漏らしながら後に付いてくる。俺はいつ子持ちになったんだろうか。

「本当に料理した事ないのか？」

「ここのマンション、事前に契約しておけば勝手に食事が届けられる仕組みになって……」

このブルジョアが。

「はぁ……でも料理なんて簡単に言えば四則演算さ。余計な事さえしなければ、必要な味や見栄えはちゃんと求まる。深く考えなくていい」

「そうなんだ……」

IHコンロのスイッチを入れた頃にはもう日が暮れていた。

おかしい。まさかと思って向かいの壁掛け時計を見ると、もう7時を回っていた。

「これはえっと……熱っ！」

「こら触るなっ！ IHだからって表面は熱いに決まってんだろ！」

「ごめんなさい……」

包丁の持ち方 から教えるならこんな時間まで掛からなかったはず。最初に質問されたのは「包丁ってどこで切るの？」というレベルだった。

「もう止めだ。とりあえずリビングに戻れ」

「えっ、でも……」

「いいからほら」

「いやでも、あつ……！」

ちこりは棒立ちしていたせいか、俺が背中を押した拍子にふらつと立ち姿勢を崩した。

「危ねっ……！」

俺はとつさに腕を背中に回す。それから踏ん張ろうとしたが、タイミングが遅れてそのまま体を持ってかれた。

「うがっ……！」

「きゃっ……！」

傾なだれながら倒れる。床に着くまで数コンマもない。このまま行けばどうなるかは想像に難くなかった。

危うくちこりが後頭部を床に打ち付けそうになったところで、俺の腕が衝突を回避させた。……その代り、下敷きになった肘がものすごく痛い。

「うああえつと……！」

「そそつかしいな。大丈夫か」

一応、本当に大丈夫か確かめるために彼女の顔を見やる。すると大きく見開いた目がうるうるすると揺れていたのだ。

「わたし……止めたくないです……！」

「止めるも何もお前……」

「出水くんがこんなに協力してくれてるのに、中途半端なまま止めたくないんです！」

彼女は芯のある声を張り上げた。

頬をひと筋流れた涙。それは、悔しさを映しているように見えた。

「……何か勘違いしてないか。IHの火傷は普通のコンロよりも危ないから、すぐ休んで冷やさないと不味いんだよ」

「じゃあ……」

「お前こそ最後まで音を上げるなって事だ。この調子だと昼飯のために夕飯を抜くことになるぞ」

「う……うん……！」

どうしようもないから目が離せなかった。卵焼きを作るのに1パ  
ックすべて使い切り、生ごみが増え、夜中にゴミ置き場へ行つたつ  
いで、コンビニへも買い出しに行った。追加の費用は全てちこり持  
ちで損する事はなかったが、その代りに時間はあつと言つ間に過ぎ  
ていった。

「……………」

いつもの布団よりも心地よい感触がした。まだ眠気に淀む瞼を擦  
り、うつ伏せになっていた上半身を起こす。

「…………カーペットかよ」

朝からどうしようもない敗北感を覚える。これが貧富の差か。  
とにかく起きないと。その思いだけでのろろと立ち上がると、  
テーブルに置いたままだった俺の携帯がバイブレーションを鳴らし  
ていた。学校の時からずっとマナーモードのままだったらしい。

「電話…………？ あい、もしもし」

『おにiiiiiiiiちゃん！？ やつと出た！ 今何してるの！？』

「ああ水桜<sup>みおつ</sup>か…………今…………？ 屈辱的なシーツの上で寝てた…………」

『え、ええ…………？ もう、お兄ちゃん帰ってこないから私が安心し  
て寝られなかったじゃない。お兄ちゃんの匂いがだいぶん薄くなつて  
るの！ 酸欠状態なおお！！』

「朝っぱらから猿みたいに騒ぐなよ…………今は7時半か…………俺は家に  
寄ってから学校行くから、お前は普通に登校しろよ」

「ふうえ…………？ どうしたの出水くん…………」

スマホのスピーカーが音割れする程に妹の声が響いていたせいか、  
近くのソファで寝ていたちこりまでもが目覚めてしまった。

『はあっ！？ 今女の声が聞こえたよ！ お母さんその年で脱童貞  
なんて許しませんからね！！』

「誰がお母さんだアホ！ もう切るぞ」

終話ボタンを押すまで声が鳴り響いていたが、最後まで相手をしていたら本当に遅刻してしまう。

「どうしたの出水くん……？」

「何でもない。うちの親よりうるさいのから電話が来たただだ。ちこもとつとと支度して投稿しろよ。あとアレも忘れずに」

「……アレって？」

「弁当だろ弁当。お前が作った分はちゃんと包んでおいたから、忘れずに鞆に入れろよ。俺もう行くから」

「うん……」

まだソファから離れられない彼女を横目に、俺は適当に荷物を片付けて出ていく準備をする。並べて置いていた自分の弁当を手に取り、鞆を片手に最後の確認。そして玄関へ向かおうとすると、トコトコと歩いてきたちこりに呼び止められた。

「出水くん」

「なに？」

途中で部屋着に着替えていた彼女は、ふわふわとした上着の端をぎゅっと握りながら小さい声で言った。

「……ありがと、付き合ってくれて」

「俺もタダで手伝った訳じゃないしな。気にするなよ」

「それは……何の意味ですか？」

「俺にも得があるって事だよ」

学校に遅刻するほど家が離れているならともかく、ちこりのマンションから俺のアパートまでは歩いて3分も掛からない。朝食は無理だろうけど、シャワーを浴びる余裕くらいはある。

「ただいまーっと……」

時刻は7時45分。普段なら妹は部活のためとつくに家を出ているはずだった。

「おかえり、お兄ちゃん」

「何やってんだバカ。とつとと学校行かんか」

「そんなことより。昨日お風呂入った？」

「いや……入れなかったから今からシャワーに」

「入ってない……入ってない……洗ってないんだよね……」

「お、おい。ジリジリと近寄るな」

「にいいいちゃ　んっ!!」

玄関に、静座で待ち構えていた妹が飛び掛かってくる。相変わらず鼻が曲がるような体臭だ。風呂には入っているだろうが、どうしてもこいつの匂いだけは耐え難い。

「くんなつってんだろアホ水桜！」

「あひんっ」

飛び掛かる妹を両手で押し退け、こいつの鞆もろとも外へと放り出す。

「ああんお兄ちゃん」

「暑苦しいわ！　とつとと行け！」

どうも遺伝子らしい。俺が女性の臭いに敏感なもの、妹が俺の匂いに執着するのも。



## 澄川 美靴の再会

### 《澄川 美靴の再会》

胸のドキドキが止まりませんでした。少し冷たい朝の空気を吸い込むと、オーバーヒートしそうな思考は余計に先走ります。

「綿峰 ちこり、行ってきます」

今まで気にもしなかった表の表札に向かって挨拶。大げさかもしれないけど、わたしにとっては一世一代の決意。今日こそみくちゃんとの距離を縮めるために、このお弁当を捧げます。

出水くんの親切を、猫井さんの提案を、わたしは絶対無駄に出来ない。協力を申し出た分責任は強く感じています。だから尚の事くじけられないのです。

どんなに引つ込み思案でも、自分を追い込めば何とかなる。何とかなるはずなのです……。

「みくにはもうこみみの方から話が行ってるらしい。待たせるのも難だからもう行くぞ」

「うう……まだ心の準備が」

「……………」

時は昼休み、校舎の3階。今まさに本番の時。

「それで、何ですっちゃんが付いて来てるの」

「あんたみたいな危険人物と一緒にいるなんて聞き捨てならないですよ」

「別に悪いとは言わないし俺も嫌じゃないけど、今日は大事な作戦があるんだよ」

「その作戦内容を聞いてもさっきから話逸らしてばっかじゃん！

白状するか私を連れていくか、どっちかにしなさい」

……結局わたしと、出水くんと、一枝ちゃんの3人で行くことになりました。

「それで……本当にどこへ行くつもりなの。それすら教えてくれないの？」

出水くんが先頭を歩き、追隨するよう一枝ちゃんが歩く。最後に弁当を持ったわたしがトコトコと付いて行きます。

「校舎の屋上だよ」

ほんと飛び出た彼の言葉に、ピンと来るものがありませんでした。この校舎にも屋上があるのは想像出来るけど、そこに行ったなんて話は聞いたことが無いのです。

私が小口を開いたままだいると、一枝ちゃんは素の声色で訊ねかけました。

「え、この学校に屋上なんてあったの？」

「あるにはあるんだよ。普段は入れないよう扉に鍵が掛かってるけど、その鍵がポンコツでちょっと手を加えると開く様になってんだ。でも生徒規則に反するから、普通の生徒はわざわざ入ろうとしない」

屋上でご飯……って、意外と有るようで無いみたいです。でも都合よくみんなが規則を守るのも変な感じを覚えるのです。

「でも規則だからって、みんなちゃんと守ってくれるものですか？」

「その辺はある程度心配ない、この学校は部活至上主義だからな。ある規則を犯したら、そのペナルティーは所属部活動そのものの責任になるんだ。個人の懲罰ならともかく連帯責任なら下手な行動も出来ないんだと。これもこみみからの情報」

その話を聞いてわたしたちはある程度納得ができました。

他の生徒の目から遠ざかる必要があるのは出水くん個人の意向と、わたしたちの作戦をより確実に成功させるため。だから現状において屋上はベストポジションという訳です。

普段見ている廊下をずっと奥へ奥へと歩くと、普通のより横幅が半分ほどしかない階段がふと目に付きます。そこを上がってから、

短いタラップを伝い小さな足場に出る。ようやく慣れ始めた学校の中であるのに、少し探検気分になっちゃいます。

「ここを外して……よし、じゃあ開くぞ……」

出水くんはいつもと変わらぬ糸目をしていましたが、顔は少し強張っていました。みくちゃんとは幼馴染と言っても、1年以上会っていないから緊張しているようです。わたしは別の意味で緊張しているけど、彼の顔色を見ると少しだけ心が落ち着いた気がしました。

キィ……と錆びついたヒンジが声を上げます。それが階段の下、廊下の向こう側にいる生徒たちには聞こえたと思うと少し罪悪感が……でも今はそんな事気にしてられません。

「……み、みく!」

暗がりの通路から青空の広がる屋上へ出た瞬間、日の光が目をくらませました。その視界が戻らぬうちに、出水くんは彼女の名前を口にしましたのです。

「と……常葉くん……?」

扉からずつと離れた向かいのフェンス。そこには、わたしがいつも目で追っていた彼女の姿がありました。

肩に付く程度の長さで切りそろえられた端整な髪。それを飾る黄色いリボン。とろんと垂れた大きな瞳。……今この瞬間でも、じつと見とれてしまいます。

声を掛けあったのに、不自然に離れた距離を置いたまま出水くんは話します。

「その……久しぶり。元気だったか」

「……うん。元気だったけど、私ちよつとがっかりしてるんだよ」

「お互い同じ学校に居るって事に気付かなかったのはしょうがないけど、他の女の子から話を聞いた時は、あーあーって思っちゃったもん。本当だったら、常葉くんから突然話しかけてきてくれて、私がかええっ!? って驚いて……ってところまで考えたのに」

あれ……何か空気がおかしくない？

「……ははっ、変わってないなみくは」

「そういう常葉くんこそ、相変わらずみたいだね」

と思った矢先には、お互いに穏やかな笑顔を浮かべている。

「久しぶり、常葉くん」

「ああ」

お互いに歩み寄りちようど屋上の真ん中あたりで対面する。

正直、こんな近くでみくちゃんを見るのは初めてだった。

「こちらの2人は誰なの？」

ついにみくちゃんがわたしと一枝ちゃんの方を見ながら訊ねかけてきました。

「こっちは綿峰　ちこり、1年B組の子な。んでそっちが五木　一枝、同じくB組。今日は挨拶と言うか何と言うか……とにかく一緒に昼飯でも食おうぜ」

「そうなんだ。私は澄川　美靴。五木さん、綿峰さん、よろしくね」

「こちらこそよろしく、澄川さん」

「こっここち、こっここちとおこ……」

こんな近い距離で語りかけられたら、と思っただけで緊張してしまうのに、実際に話しかけられると喉が痙攣してまともな声が出てこない。そこに情けなさが油を注ぎ、余計に喋れなくなる。車輪が外れた車の様に、勢いに乗せた分だけ激しく壊れる。

「あ、えとこいつすげー恥ずかしがり屋でさ、こんな調子だから友達も出来ずにグエッ」

「お前が言うか出水」

「一枝ちゃん、みぞおちはキツいんじゃない……」

「私も出水もちこも部活に入っていないの。澄川さんも入っていないって聞いたから、無い者同志の集まりって事で。ほら弁当広げようよ」  
「一枝ちゃんには作戦を伝えていないけど、わたしの願いはちゃん

と伝えてあるから気の利いたフォローをしてくれる。言葉では伝えきれない様な感謝を表情で示そうとすると

「口に何か入れれば落ち着くから。座って座って」

そう声を掛けてくれました。……いつまでもフォローされてばかりじゃ意味がない。

わたしの力で、前に進まないと。

猫井さんはちゃんと「屋上でお弁当を食べるから」と言ってくれたらしく、みくちゃんも可愛らしい包みをほどいて、手のひらに収まりそうな小さい弁当箱を取り出しました。弁当を渡す時は、あえて手前の分は持ってこさせるのがポイントだとか。理由は分かりません。

「あ、そうだ。これを渡しておかないと」

わたしが弁当をいつ渡すかタイミングを図りあぐねていた所に、出水くんは懷から何かを取り出しました。

「これ、みくのニーソ」

「あ、あれ？ 私が無くした……なんで常葉くんが？」

「いやー落ちてたのを拾ってさあ」

はわ、はわわわ

なんて爆弾取り出したのですか出水くん

「それなくしたの2日くらい前だよ？ あんまり嗅いだりしたらやだよ、恥ずかしい」

「なあにちよつとだけだよ」

「ちよつとの度合いがわかんない！ しょうがないなあ……えへ」  
何だろう。またまた変な空気感。これが幼馴染パワーなの……？

「はい、返す」

「ありがと拾ってくれて」

……でも、なんだか屋上に侵入した時よりも大きな罪悪感が胸を襲ってきます。本当はわたしが返すつもりで　いいえ、実質盗む

ような事をしてしまったのに、出水くんは泥をかぶることも厭わないでちゃんとソーソックスを返してくれた。

このままじゃわたし、ここにいて資格なんて……

「それと、ちこもみくに渡すものあるんだよな」

「えっ？」

ふと話を振られて何事かと思ったけど、わたしなりにすぐ意味合いを理解しました。

自然に弁当を渡すタイミングは、今しかない。

「あのっ！ こ、こここれ……」

包まれたままの弁当箱をそつと差し出す。

「お弁当？ これ、私にくれるの？」

顔が熱くなりすぎて肌が爛れそうだった。これ以上話したら骨が溶けてしまう。

必死の思いで、わたしはコクリと1つ頷きました。

「ありがとー！ こういうの久しぶりだなあ。他の人のお弁当ってわくわくするよね！」

何の疑いもなく受け取ってくれた、その驚きがうれしさに変わる。心の肌がふわっとくすぐられたような感じがして、幸せ色に染まった。

「どんなお弁当だろ。さあて……よいしょ」

パカリと上蓋を取って覗き込むみくちゃん。その様子を見てわたしは

「うわあすごい綺麗！ 綿峰さんって料理上手なんだね！」

わたしは、凍りついた。

「……………え、えへ」

野菜の彩も、ご飯の具合も、ちゃんと考えられている整った弁当。こんなの私が作れるわけがない。でも何で、現物が目の前にあるのか。一体誰がこの弁当を……

「……………」

作った人が、わたしの右隣に居ました。

出水くんは口元を不自然に吊り上げ、額には分かりやすい冷や汗を浮かべてます。その様子を見てわたしは全てを悟りました。

『弁当だろ弁当。お前が作った分はちゃんと包んでおいたから、忘れずに鞆に入れるよ。俺もう行くから』

今朝、出水くんはわたしの家を出る時、自分の分である1つを持って行きました。テーブルの上にはわたしが作った2つの弁当と、出水くんが作った弁当が1つ。

彼は間違えてわたしが作った2つの内1つの弁当を持っていき、わたしは自分の弁当と出水くんの弁当を鞆に入れ、重ねて運悪くそれを渡してしまった。

「こんなお弁当本当にもらっていいの？」

みくちゃんは笑顔でわたしに訊ねかけてきます。それを見て思うのです。

別にこのままでも良いんじゃないかと。

わたしの作った実際の弁当なんか、彩が悪ければ素材の形も崩れてるし、意地になってひとりで詰めてみたらぐちゃぐちゃの構成になったりで、今思えばとても人に見せられるようなものじゃない。でも、整った出水くんの弁当をわたしのだと言え、きつとみくちゃんは今の笑顔のまま食べてくれる。その方がきつと……

「（おい、ちこ）」

出水くんが聞き取れないほどの小さな声でわたしを呼びました。

「（なん……ですか）」

「（このままじゃ不味い。みくが俺の弁当を持っているのはともかく、今の状況だと俺とお前が同じ弁当を持ってるって事になるんだぞ）」

はっ 確かにこのままだと、わたしと出水くんが一緒に弁当を作ったという事が自ずとバレしてしまう。作ったのは本当だけど、一枝ちゃんを含めてあらぬ誤解を招きかねません。

どうしよう……どうすれば……！

「ふんふんふん　じゃあいただきます」

「（おい、ちこ……！）」

私は　もうこれ以上……！

「ち、ちよつと待って！」

勢いに乗せたまま声を上げその場に立つ。

「どうしたの……？」

ぽかんとした顔でわたしを見あげるみくちゃん。その純真な瞳が、余計に心に刺さったトゲを深く刺し込む。これ以上　いや、せめてこれだけは嘘をつきたくないから！

「ごめんなさい澄川さん！　わたし、荷物を出水くんに渡したときに弁当が混ざっちゃってね、えと、その、これが……本当に、私が作ったお弁当で……」

やっぱり勢いだけじゃ持ち切らなかった。卑怯な事を考えていた自分に腹が立って、恥ずかしくなって、膝元にある弁当をハイと言つて渡せない。

「あ……ああ！　よく見たらそれ俺の弁当じゃん！　気付かなかつたわーごめんなー。という訳でちこ、正しくなるように交換だ」

「ちよつとバカじゃないの出水！　あんたの弁当なんか食べたらどんな病気になるか分かったもんじゃないってのに」

わざとらしくたけど、一枝ちゃんが突っ込んでくれたおかげで自然に弁当を回せました。

これで本来の形に。でも、だからといってわたしの弁当が見栄え良くなった訳じゃない。むしろ出水くんのを先に見たから、余計に見劣りするに決まっています。

結局、嘘をついた時と同じくらいに後悔の波が襲ってきました。

「こつちが澄川さんのお弁当なのね。じゃ、いただきます」

もうどうにでもなれ……元々、わたしが悪いのだから……



「ん、おいしー。確かにちょっと崩れてるけど、このくらいの薄味がちょうど好きだなー」

聞き間違えたと思った。それを確かめるために顔を上げると、わたしのお弁当を手を持ったみくちゃんがつこりと笑いながら言うてくれたのです。

「ありがとね。えーっと……ちこちゃん！」

もう……言葉ありません。

出水くんがみくちゃんの方を見て2度頷くと、今度はわたしに向かって言いました。

「美味しくて当たり前だって。同じ材料を適量使ってればね」

「……？　ちよつと出水」

一枝ちゃんがピクンと反応しました。私も少し遅れて、その言葉の言わんとする意味合いに気がきます。

「何であんたがそんなこと知ってるのよ。同じ材料を適量って」

「あ、ああ！　深い意味はないって！　近所なんだから使うスーパ―も同じだし、ほら美味しいイコール適量って事だろ？　そういう意味だつてば」

「ふーん……」

「そうだよな、ちこ？　ほら試しに俺の弁当も食べてみるって」

首の皮一枚繋がった……ようです？　そう安心したわたしは、咄嗟に差し出された出水くんのお弁当に1つ手を付けました。

「ダメだよちこ！　こいつのおかずなんか食べちゃ……！」

「だ、大丈夫だって。同じ材料なんだし」

そうだよ。同じ材料なんだし、こんな美味しそうな餡の掛かった鶏肉が

「もぐも……ふぐっ!？」

鼻腔を刺激する衝撃的なまでの酸味。なんですかこれ、酢の感じでもない。それに少し甘い匂いがしたと思ったら、舌の上がピリピリと……

「ひ、まっ……うぐう……」

肩と背中力が抜けて座り姿勢のまま項垂れる。  
出水くん、本当に同じ素材を使ったのですか……？

## 猫井 こみみの策謀

「むふう、君たちに集まってもらったのは他でもない」

寄せられた4つの机、狭苦しい空間、そこに差し込む窓からの陽光。悪くないです。

「……それでこみみ、俺たちをここに集めて何を始める気なんだ」  
まったく出水は顔がまったりしている割にはせっかちで。きつと下のマス掻きも早いんじゃないかと思うこみみです。

「あの……顔を合わせるのは初めてなのに、急かすようですみません。でもそろそろ教えてもらえると」

出水に依頼を持ち込んできた張本人、綿峰 ちこり。ちゃん付けで呼ぶと長たらしい感じがするからちこりんと呼ぶことにしているのです。

「……………」

彼女の隣に座っている女子生徒、五木 一枝。ずっちゃんにはもう話を通してあります。

私、猫井 こみみには予てよりの野望がありました。

それはこの学校の部活システムを利用して、理想的な生活を送ること。……ただそれは、こみみだけが考える事じゃない。同じ画策を立てる人が多すぎて、条件は当然のごとく厳しくなっていたのです。

ここは本校舎の西側にある木造の建物、利用する生徒たちはみな旧棟と呼ぶ古い校舎。昭和に建てられた基礎を繰り返し補修して、外観はそのままだけど内装は迷路になっているという不思議な構造を持っています。

その角の角。2階の隅っこにあるこの部屋に、こみみはこの日までに関わったターゲットである3人を揃え、我が野望を本格的に押し進める為此の円卓会議を開いたのです。

「よしよし、教えてあげよう。こみみがみんなをここに集めた理由を」

こみみは悪魔でも大将でもありません。明朗で立派な淑女であり、常に人の事を考えます。自分の野望を叶えたいからって、他人を無視しては通るものも通りません。

……もともと、他人を利用するという言われ方をすると、少し怪しく見えるかもね。

「綿峰　ちこりくん、言い改めてちこりん。こみみは貴女の願いを叶えるために色々手助けをしました。その結果と感謝している恩を述べるのです」

彼女は少しの間を置いてから口を開きました。どうやらなるべく丁寧に話そうとする子なようです。

「わたしは澄川　美靴ちゃんと仲良くなりたくて……それで出水くんに手助けを頼んで、間接的に猫井さんにもお願いをしました」

「ああ、こみみの事ならこみみて呼んで構わないよ」

「えっ……と、んー……こみ　ちゃんに手助けしてもらったおかげで、お昼はみくちゃんと楽しくお弁当を食べれました」

「途中で誰かさんの弁当をつまんだせいでリタイアしかけてたけどね」

「何だよずっとちゃん……俺はいつもの通りに作ったただけなのに」

話に平気で割り込むずっとちゃんに、すぐ応えを返す出水。コミュニケーション自体は粗雑だけど、この2人はなかなか場の雰囲気を保ってくれそうですね。

「続けてちこりん」

「はい。廊下での挨拶もちゃんとできて、放課後も声を掛けられました。まだ理想には達していないけど……本当につ、みんなの協力に感謝しておごっ!？」

礼をして机に頭をぶつける……古いというかベタだけど悪くないですNE、ちこりん。

「たたた……えと、そういう訳でお返ししきれない程の感謝でいっ

ばいです」

「そうでしょうそうですね。だけどちこりん、それだけじゃ不安でしょう。実際に仲良く離れても、それ以上の関係には成れないね」

「それ以上……の関係……」

むはあ、驚いたような顔してる。でもあなたがガチ（・・）なのは、こみみの目に掛ければ即お見通しですよ。目の色が違うもの。気付かれない方が不思議でござい。

「だけどこみみは応援するよ。より深い関係になるために」

「ど、どんな方法で!？」

机に手について顔を上げるちこりん。他の2人と見比べると、その必死さは余計に際立つものです。ただずっちゃんにはともかく、出水はよっぽど気付かないだろうなあ……。

「考えて見なさいです。みくちゃんと同じ部活動に入れたら、より仲良く親密になれると思いませんか」

「それはもちろん! でも……彼女は部活動に入っていないし、そもそもわたしにそんな行動力は……」

「のんのんのん。失礼ながらそれを見越しての質問でござい。タゲは部活動に入っていない、ちこりんも部活動に入っていない……ここから導き出される答えは1つ」

「な、まさか……」

出水が糸目をさらに細くしてこみみの顔を見あげてる。ここまで至ればもつたいぶる必要はどこにもないです。

「そう! こみみたちで部活動を作って、みくちゃんを入部させればいいですよ! それなら既存部活動のしがらみに悩むこともないし、思うように活動を展開できる。まさに最強最良の選択なわけですよ」

「で、でもこみちゃん。部活動ってそんな簡単に作れないはずだよね?」

呼び捨てでも良いって言ったのに……でもちこりんのような性格の人には難しいか。出水に言われたら腹立つけど、彼女ならこみち

やんでも全然可愛く聞こえるね。

「ちこりんご明察！ 物語高校で部活動を設立するには大きく2つの条件があるの。まず1つは初期部員が5名以上かつ掛け持ちなし。2つ目はちゃんとした活動目的があり、かつそれが公的な競技や公募を指すものである、だね」

「公的な云々ってのは何だ？」

「別に難しい事じゃないよ出水。野球部なら甲子園、ボードゲームなら対応する大会、数学部なら数学オリンピックなんてのもあるね。結果を残せる目標が無いと、散漫な活動目的の部活が乱立しちゃうから」

「へー……そいつは知らなかった。……で、5人って事は完全に俺たちを数に入れてないか」

「こみみが情報出したり協力した事の代わり って言えば解ってもらえるかな？ もし反対するなら、現況をほとんど知り得てるこみみが人間関係を滅茶苦茶にすることも出来るんだよ？」

「お、お前なあ……ずっちゃんも何か言ってやってくれよ」

「でも……私は」

無駄ですよ出水、ずっちゃんには詳細たる話が既に行ってますから。

「……じゃあ話を聞くだけ聞く。何の部活を作るつもりなんだこみみ」

その言葉を待っていたですよ出水。

彼には以前から仕込みを入れていました。ライトノベルや漫画を読みこませ、興味をある程度持たせる。刷り込みが上手く行っても、こみみの提案に猛反対する事はないはず。

ただ1人不明瞭なのが、綿峰 ちこりという存在。学校における立場は観察してある程度把握しているけど、それ以上の事はさっぱり解らない。趣味とか身分とか、見た目の割りには謎な子です。まあ気にしても仕方ないです。

「こみみが作る部活のテーマ！ それは……  
ずばり、ライトノベルなのです！！」

決まった……。こみみのやりたい事はずばりこれでござい。

「何だそれ…… 文芸部とかに入れば済むんじゃないか。それにラノ  
ベで公募って……」

まったく男のくせにロマンがないですね出水には……

「乗っかりじゃダメなの。文芸部は文化系だとそこそこの規模が大き  
いし、より差別化するとなれば分けるのが妥当ってもんでしょうが」  
それにこみみが独裁じゃない。

「ライトノベルの方が公募に関しては選択肢豊富だかね。（

げーあー）文庫に演劇文庫に澄川スニーカー文庫にもふもふmfmf文庫……

……内容は微妙に違ったりもするけど、おおよそレベルごとに公募  
があるの。部活の目的としては十分すぎるって」

「ラノベ書きたいなら1人で書けばいいだろ、部活にするほどでも  
ない」

「こみみが書くんじゃないし。それに建m……いや、理由としては  
冒頭の説明通り、みくちゃんを入部させる事が目的だかね。出水  
も知ってるでしょ、みくちゃんはラノベが好きだって」

「みくがそういうの好きなのは確かに……って、お前が書かなきゃ  
誰が書くんだよ！」

「それは君に任せるよ。こみみがやりたいのは作品作りのサポート  
役なんだし」

「はあああ！？ お前強引なものいい加減に」

突然大きな音がした。バンッ、という机を叩く音。何事と思い視  
線を横に送ると、そこには顔を伏せ気味にして小刻みに震えるちこ  
りんの姿がありました。

「雰囲気がまったく違う…… “威圧” と呼べるものが映っている気  
がした。」

「それだけは……絶対に嫌だっ!!」

狭い部屋に彼女の声が響き渡る。

予想に反する答えだった事はすぐにどうでも良くなった。

何……？　まるでレバーを引いてスイッチを切り替えたように、表情も声色も変わっている。威勢が良いだけじゃない。一言で表すのなら……そう、この瞬間男になってしまったような。

「ラノベなんか……臭くて、ダサくて、欲望だけは一人前のキモオタが読むものだっての……。それを作ったりしてる奴らなんかは、碌でもない妄想をトレンドだと言いたげにゴミを量産し続ける……。そんな職を目指す奴に至っては、何も出来ないクズのクセに、小学生以下の文才でゴミを他人に送りつけ、その程度で人の上に立つ事を妄想しているんだ!!」

何……？　この子いま何て言った？

ラノベを馬鹿呼ばわり？　なんなの？　確かに進んで馬鹿をするような事はあるけど、真正面から否定されるとなれば、この私が我慢できるはずが無かった。

「あれれ……何かこみみ、聞き逃しちゃいけないような言葉が聞こえたなあ……」

夕日が街並みの向こうへと消えてゆく。

あれから発生した騒ぎは、出水の直球かつ大胆な行動により収まった。もつとも、保健室で意識を取り戻したちこりんが警察を呼んでいない限り、これ以上変な事にはならないはずだけど。

「はあ……ちこりんがあんな挙動取るとは思わなかったなあ……」



完全にこみみのリサーチ不足。彼女が“ライトノベル”というワードに引つかかると、まるで男になってしまったかのように激しくなるなんて。これじゃあ叶いかけた部活設立の目標も一気に白紙戻りなのかなあ……。

「あのっ……こみちゃん！」

「ふえ……？」

なんだか力不足な自分が情けなくなつて、夕日が少しにじんで見えたその時。校門を出ようとしたこみみの後ろから、息切れの混じった声が飛んで来たのです。

「ちこ……りん？」

「はあっ……はあっ……」

そこには膝に手を添えて激しく息をついているちこりんが居ました。声色、いっぱいいっぱいな表情、内股になっている格好を見る分には、どうも女の子のちこりに戻ったようです。

「わたし、どうしても……言っておかないと……あんなに怒鳴り散らして……」

はー……一応覚えているんだ。自分の人格が変わった事。

「こみみは別に気にしてないよ。それで、何を言つて？」

「こみちゃんは……元々、わたしの事を考えて部活を作ろうとしてくれたんだよね。みくちゃんがラノベ好きだつて事も先に知った上で」

「いや、こみみの元々は自分の……」

「そうなの！ 自分の好き嫌いだけで、チャンスをふいに出来ないつて考え直したの！ それに今まで協力してくれたこみちゃんの努力も裏切れないし……」

あれ、これは乗った方が良いフラグ？

「……ま、まー確かに努力しましたが！？ あーでもちこりんが辛いなら？ 別に無理しなくてもいいっていうか？」

「とんでもないです！ わたし……確かにライトノベルは、今のところ好きになれないけど……みくちゃんの為に、それにこみちゃん

やみんなの為にも、好きになりたいんです!」

「その心、はつきり聞かせてもらおうよ」

こみみが真剣な表情を一瞬見せると、彼女は口元を結んで小さな間を置いてから答えたのです。

「わたし、やります! 一緒にライトノベルの部活動を作りましょう!」

## 綿峰　ちこりの懇願

彼は突然遠くへ行ってしまいました。

親の都合なのはしょうがないけど、私の気持ちが整わない内に愛知を出ていってしまった。

それがどうしても許せなくて　違う、許せない自分が情けなくて……ずっと連絡が取れない内に、とうとう機会を失ってしまった。そんな喪失感に溺れながら、私も親の勤め先を頼り東京へ来た。そしてこの物語高校に入り……再び出会った。

本当に彼が居る事は知らなかった。もし入学する前に知っていたとしたら　私は何としても別の学校に行こうとした。そのくらい、心の歪みに踊らされていた。

でも声を聞いただけで、今までのしがらみが無かったと思えるくらい、自然に顔を見て話す事が出来た。

やっぱりすごいんだなって思ったのです。人を繋ぐ、この気持ち

が。

「みく、ちょっと」

2時間目が終わった直後、教室の入り口から私を呼ぶ声がしました。彼の事は声変わりする以前から知っています。顔を見なくたって、声だけで表情が手に取るように解ります。

「どうしたの常葉くん……と、ちこちゃん」

「急に呼び出したりして悪いな。ちょっと話があるんだ」

「私は全然大丈夫だよ。それで話して？」

「ほら、ちこ。お前から言わないと」

「う……うん」

「……この子。」

「は、はのっ！　おはようございます！」

「お、おはようちこちゃん。そんなに畏まらなくても、友達なんだし」

「そ、そうだよ、うん。で……えつと何て言うんだっけ出水くん……？」

私が出水くと会った時も、おそらく会う前も、たぶんこの子は彼と一緒にいる。

どういふ関係なのかは分からないけど、少なくとも私にとっては歓迎出来ない相手に見えます。だって今もほら……何気に学ランの袖を掴んでるし……。

「……で……だろ」

「う、うん……」

私は特別怒りっぽい性格ではないはずだけど、目の前でひそひそ話されると無性にもやもやしますね。何でしようこの気持ちは。

「えとですね……わたしの、いやわたしのじゃないんですけど……」  
「え？」

「澄川……んや、みくちゃんもぜひ、私と同じ……」

「同じ……何かな？」

少し間を置いてから、彼女は大きめの声で言ってきました。

「同じ、部活に入ってほしいの！」

「え、ええ？」

突然かつ予想もしていなかった申し出に、少し退き気味に反応してしまいます。

「同じ部活って言うてもね、今から作る部活なの。部員は定数で5人必要なんだけど、あ、決してみくちゃんが数合わせとかじゃなくてね、出水くんとかこみちゃんとか一枝ちゃんとかと一緒にね、その……ラノベを作るうっていう集まりなんだけど……」

彼女のたどたどしい説明に付け足すように、常葉くんは横から説明を入れました。

「元々の発案はこみみなんだよ。何でもあいつの姉が本物のラノベ編集者らしくてさ。その真似事……って言うて怒るんだけど、似たような事を今からやりたいって言うんだ。お前昔から少年誌とかライトノベルっぽいのが好きだったろ？」

確かに『ぼくらの七日間戦争』始まり『ロードス島戦記』とか『スレイヤーズ』は読み込んで今もいっぱい持つてるけど……

「えと……私と、常葉くん、一枝ちゃんと、猫井さんと……ちこちゃん、5人なんだよね」

「そうそう。5人の掛け持ち無し部員じゃないと設立できないんだってさ。俺が知ってる部活動に入っていない生徒って言ったらお前ぐらしいじゃないんだよ。な、考えてくれないか？」

何となくこの学校に入った私は、部活動が盛んなことなど事前を知る由もなく、今まで加わりたい活動を見れなかったからどこにも所属しなかった。

もちろん常葉くんと同じ部活動に入れるなら、申し出を歓迎したいです。でも……

「その……ちよつと無理かなって……」

「「ええっ!？」」

反応まで一緒……

「だって私勉強追いつけてないし……」

「お前中学の時からテスト480点代の超優等生だったろうが」

「う……」

「頼むお前の力が必要なんだよみく!」

何でそんなに……必死なの……?

「みくちゃん……」

「とにかく、今のところは無理。授業始まるよ常葉くん」

「おつ、あ、ちよつと待てよみく!」

私は身を翻して自分の席に戻る。そして一瞬入口の方を確かめると、教室へ入ろうとしていた先生に道を譲った2人の姿が見えた。そしてそのそと廊下へ下がると、先生がピシヤリと戸を閉め切ってしまった。

「……で、この関数を……」

授業が始まり、ざわざわと雑談で溢れていた教室が静まり返る。

聞こえるのはカツカツと言うチョークの音と、先生のぼそぼそした声。いつもの光景、当たり前前の作業であるはずなのに、私のシャーペンは無意識にルーズリーフの外へとほみ出ていた。

「あ……」

いつ誰に見られても恥ずかしくない、むしろ自分から誇れるようなノート作りは昔から心がけている習慣。成績が良くなったのはそれからだけど、決して結果は意識しようとはしなかった。彩りを付ける訳じゃなく、塗りつぶす勢いで書き込む訳でもなく、的確に整然に揃える。それは今日まで変わらぬ行為であり、保つべき意識であつたのかもしれない。

「（あの時以来だ……）」

心が揺らいだあの日、私の神経はシャーペンの先まで行き届かなかった。何度もノートの端から滑落し、机に落書きをし、後で惨状を目の当たりにすると、その日の終わりに冊子ごとゴミ箱に捨てた。翌日、先生にノートを突き返された。

私は先生に諭された後、常葉くんが愛知を去った事を知った。引越しが決まったのは以前からだったけど、私が知らされたのはつい2日前。

『その……お前に言うの、ずっと迷つてて……何て言うか』

常葉くんなどの優しさだったのかもしれないけど、当時の私には理解出来なかったし、今でも十分腹が立つ。幼稚園の頃からずっと一緒に、仲良しで、これからとも思っていたのに、彼にとって私は、数百キロ程度離れたただで縁が切れてしまふと思う相手だったと……。

だから私は諦めた。お母さんから常葉くんの携帯番号を教えられても、受け取っただけで電話はしなかった。住所も教えてくれたけど、地図で確かめようとも思わなかった。

「（また……?）」

そう、また同じことが起きようとしている。彼はこの学校に、教室を1つ挟んだ向こうの部屋に居ると言うのに。

手に届く距離に居るのなら　　きっと私は耐えられない。

チャイムが鳴ってから、すぐ廊下へ出る。そしてB組の前を通り抜けて一直線にA組の教室へと向かった。まだ授業が終わった直後だからか、廊下に人影はない。

「……………」

何となく予感がして、教室の後ろ側にある戸の前で立ち止まる。

10秒、30秒と経ち、廊下の向こうから声が聞こえてくる。歩みを進められない私を煽るように、ヒヤヒヤと鼻に掛かった笑い声で、背中を掻きむしる。

「　　おっ」

本当に来た。ガツと勢いよく戸を引いたのは、間違いなく彼だった。

「あ、えと、常葉くん」

現われる事が何となく想像が出来ていたせいか、余計に慌ててしまふ。

「その……………さっきの話なんだけど」

「ああ、部活の事？　もう一度ちこを呼んでお前の所に行こうとしてたけど　　」

彼は窓際の壁に背を預け、棒立ちになった私に向かって口を開く。

「お前が嫌なら、はつきり無理だと言ってちこを納得させて欲しい」

「……………え？」

「ま、本来の目的からズレ　　あいや、話しやすい相手をつて事でお前に相談したけど、みくだって暇じゃないだろうし、今は小学生や中学生の時と状況が違う。お前の事だから、就職とか先の事をちゃんと考えてるんだろ？　それをふいにさせたくはないんだよ」

揃ってなかった視線が真っ直ぐ交わり

「お互い、他人じゃないだろ」

……………男の人って、本当に無神経でガサツ。自覚ないのがタチの悪さに拍車をかけている。

「さっきの……あの、ね」

でも、その真っ直ぐさに

「あんな風に言っただけ……」

私の様な屈折した心の女の子は

「やっぱり私」

憧れたり、惹かれたりするのかもしれない。

「うし、分かった。ちゃんと伝えておく。こみみは明日集合を掛けるって言ってたから、教えた通りの部室にちゃんと来いよ」

「うん……！」

私は彼に、謝らなければいけない事がある。

離れて縁が無くなる事、本当に恐れていたのは、やっぱり私だった。

別れの日を恐れ、別れた後も恐れ、今に至っては会える事さえも恐れていた。結局尻込みのしっぱなしだ。でも……

「あ、ちこちゃん！ やっぱり入ってくれるんだってね！ 良かったらその……色々お話を兼ねて、またお弁当一緒に食べませんか？」

もう、立ち止まっている訳にはいかない。

「うん！ でも今度からは、屋上に行けないね！」



## 猫井 こみみの馬鹿

窓から望む新しい風景。使い古された椅子に腰かけ、突風で割れてしまいそうなほど薄いガラス越しに、暮れはじめた空の色の移りを眺める。

今日は初めて全員が部室に揃う日。だけど私は、今でも自分の状況に納得している訳じゃなかった。

「もしもし兄貴？ うん、そうそう、いつもは送ってもらってたけど、今日もっていうか、今日からしばらくは大丈夫だから」

『ど、どうしたんだよ一枝！ まさか彼氏とか……お兄ちゃん許しませんk  
』

ピッ

「ふう……いつまでも過保護なんだから」

「どうしたのずっちゃん」

「別に、出水には関係ない。連絡しないと兄貴がうるさいからね。時間ない癖に私の世話ってなると絶対に飛んで来るから」

本当に 便利なんだけど逆に世話の掛かる兄貴。仕事忙しくせにいつも……

「他のみんな遅いな」

「……そうね」

ライトノベルを作ろう、そんな目標を元にこみみが作ったこの部活。元々私は冗談半分で賛同したのだけど、彼女が相当努力したおかげか、本当に正式な部活として発足してしまった。

部活の名前を決めるとき、文芸部だと同じ部活が既にある、ラノベ部だとタイトルの都合が悪いとちこりに拒絶された。

それからいくつか案が出たのちにようやく選ばれたのが……その名も《本部》<sup>ほんぶ</sup>。

こみみは「本を扱う部と本拠地であるという意味を掛けているのだ！」とどやあな顔をしていたけど、なんだか変な空気になってこ

「つちが恥ずかしくなったことだけをよく覚えている。恥ずかしかったりややこしい名前にならなかったのは幸いだった。」

「ずっちゃんのお兄さんってよく車で迎えに来てくれてたもんな。顔色悪いけどすごい良い人じゃん。そんなに家まで歩くの面倒だったか？」

「あ・ん・た・の・せいでしょうが！ あの事件の後、私しばらく人前歩けなかったんだからね！ どこでもひそひそ声を立てられて…… 本当にトラウマになったんだから」

「へー…… そんなことよりみんな遅いなあ」

「そんな事ってどんな事よゴルア！！」

「痛い痛い痛い痛い！ 手の甲ゴリゴリするのやめて！ 本当に痛いから！！」

「今度悪意あるバカ言ったらチエーン巻きつけて引きずり回すから……」

「そんなやり取りをしていると、入口の扉がガチャリと開かれて3人の女子生徒が入ってきた。」

「おつまたせー。2人とも変な事してなかったかい？」

「ちこりと美靴を引き連れたこみみは、ニヤニヤと薄気味悪い笑顔を浮かべながら部室に入ってくる。」

「顔見て早々アホな事言わないでよ。それで、ずいぶん来るまで時間かかったようだけど…… 何かあったの？」

「そう訊ねながら、部室に揃った5人はそれぞれの椅子に腰かける。こみみは一応部長なので4人とは向かい合わない位置に椅子を付けてから本題に入った。」

「それではこれより、第1回本部の会議を始めようと思うのであります。まず最初に話すべき事は色々あるんだけど…… それ以前に1つ、先ほど問題が発生したのです」

「美靴は少し体をかがませて反応する。」

「問題って…… 何ですか？」

「実はですね、この部室が没収される危機にあるのですよ」

「ど、どういう事だよこみみ」

出水は顔を上げて彼女に訊ねた。

「いやね、今は5月なわけで、既存部活動の募集期間が終わったから、こみみ達にみたいな新興部活動が増えてくるのだよ。でも余っている部屋はほとんどない訳だから、有望な新興部活動が出来た場合、この部室を他に取り上げ有れる可能性が濃厚、と通告されたの」話を聞いたちこりは、早々に反応した2人と違い冷静に考えを口にする。

「でもそれって、ちゃんと真面目に活動しなさいって言う忠告みたいなものじゃないのかな？ 先生に言われたのなら、お約束な文句だと思うけど」

「まーちこりんの言う事も大体は間違ってない。でもね、こみみは1度手に入れたものを他人に易々と奪われるのが大嫌いなもの！そこでこんな作戦を用意しました」

ガンツ と勢いよく机に叩きつけられたのは缶詰。だけど普段見るシーチキンとかの缶よりは一回り大きく、そして若干表面が丸みを怯えている。

「なに……これ」

言葉に詰まりながら私が訪ねると、こみみがその口を開いて説明する前に出水が奇怪な声を上げた。

「ふごっ！？」

「どうした！？ い、出水！」

目の前に座っていた彼は鼻を押さえて目を見開いている。とつさの勢いで立ち上がってみると、鼻よりも先に目の刺激を覚える。そして冷静に嗅覚を澄ませてみると……

「なにこれ……臭い」

ほんのり、だが確実に臭う。何これ。

原因は探るまでもない。こみみが机に叩きつけたこれに違いない。「何ですこれ……？」

不思議そうに美靴が顔を近づけると、匂いに気付いたのか一瞬顔

をしめる。しかし、人のものにケチを付ける事が気に掛かるのか、すぐに表情を戻して訊ねていた。

「まあまあ。ほらずっちゃん、缶に書いてある名前を読んでみて」

「うん……スース、トロツミ、ングス……？」

私に続く様にして美靴が英語？ らしき文字を読み上げる。

「スルス、トレミングス？」

「はいみくちゃんほぼ正解、さすが優等生だね！」

「え、えへへ……」

「……ちっ」

別に英語なんか読めなくなつて死なないし？ あとこのOの上に付いてる点々は何？

「これはシユールストレミング。中身は単純にニシンの缶詰なんだけど……ま、こういうものかは出水を見ればわかりやすいと思うよ」

「ふごっ、むぎリユアアアッアア！」

……キモい。鼻を押さえて奇声を上げ続けている出水。まるで襲い掛かるものから逃れたいのに、あまりの恐怖から腰が上がらなくなつた子供の様な……どこかモロい苦しみすら見て取れる気がした。

「あのように、敏感な人なら失神しかねない様な悪臭を放つ事から、世界一臭い食べ物として知られている伝説的食べ物よ」

だから奴はこんなにも悶絶しているのか。さすがに洗濯された布の匂いを時間差判別できる超人には過ぎる刺激らしい。キモいけど、見ててちよつと面白い。

「さーてこれを今から開ける訳ですが」

「ちよつと待ってこみみ！ そういつのつて屋内でやるものじゃない！？」

「まるでくさやを食べたことあるような語りだねずっちゃん……もちろん、それを解つて、むしろそれを狙ってるのですよこみみは」「いやいや話聞いている？ 世界一臭いものつて言ったら匂いすごいの？ 車内で腐つた鶏卵ですら大変なのに、ドリアンに至つて

はあまりに臭すぎて大食い大会が中止されたのよ！ 臭いの世界はほんま恐ろしいんやで！！」

「なんで関西弁になってるのかこみみは理解に苦しむですが。とにかく理由はあるわけですよ」と

そう言いながらこみみは“家庭科室”というタグが付いたままの缶切りを手にとって言う。

「新規に部室を手に入れない輩たちは、やっぱり追い出したい部活よりも手に入りたい部室を選ぶもの。だからこの部室をシユールストレミングに染めてしまえば、目を付けられたとしても臭いバリアのおかげで守られるって事なのだよ！」

「それじゃあ部室以上に大事なもの失うって！ ちょっと待」

言葉の介入を耳にも留めないこみみ。そろそろ本当に不味いと思ひ私が手を伸ばすと、指先に触れた反射で缶切りの刃が地獄の門を叩いた。

「……！？」

声にならない声ってこういう事か。一瞬だけ、そう考える余裕が出来た気がした。

それを現実逃避と認識する頃には、もう眩暈のする程の悪臭に捕らわれた後になる。つまり手遅れな訳だ。

「まっ……窓……窓……！」

美靴がハイハイしながら窓の方へと進む。しかしこみみは、自分の鼻をつまみながら大声で叫んだ。

「だめにやみくひゃん！ 臭いがていひやく（定着）しにやいれひよっ……ごふえっ！？」

そりゃ口で息すれば鼻にも入るでしょうが……。

「うー……！ こんなの、定着もへったくれも……！」

そう呻きながらちこりも窓の方へ向かう。しかし2人とも数歩進んだだけで力尽きる。床に顔を付けるとひよひよと弱い声漏らしながら一切動かなくなってしまった。

「……ね、ずっちゃん。解ってると思うけど」

「ここまでしておいて何を解れつてのよ！」

「このシュールストレミングをどうすれば良いかって話だよ」

「そんなのどっかに捨てれば」

「無理。生ごみ投棄ならともかく、こんなの放置したら警察沙汰だよ。しかもこれ1缶5千円するし」

「それを自腹って本当にバカじゃないの……」

「いや、部費だけど」

「バーカバーカ！ ホントにバカ！！」

「とにかくこれを処理するためには食べるしかない！ ほらここにフランスパンも用意したから、ささ、がぶつとどうぞ」

「なんで私が食べるのよ！？ 出水とかに突っ込んでおきなさいよっ……！」

「さすがに今の彼には酷だし、それにこのパンは部費じゃなくて私のおごりだし」

「この際どつちでもいいわア！！ わっ、ほんとに、ほんとに止めて？ ナチュラルに盛らないでよおおお！！」

こみみは片手で箸を使い、器用にニシンをフランスパンに高々と盛り、薄切りにされたパンを押しつぶすようにして重ねる。そして出来上がったサンドイッチをおもむろに掴むと、こつちを睨んでニヤリとひと笑い。

「うりゃあああー！！」

「ぎいいあつううむぐっ！？ ぐ……ぐ……？」

柔らかめのフランスパンから飛び出す柔らかな物体。舌の上に躍り出た瞬間も激烈な匂いを放ちつつける……がしかし、

「もぐ……もう……？」

いや……ちよっと塩辛いだけで、別に不味くはない。むしろイケる。

「どうだいずっちゃん」

「……………」

ただ、絶対に認めたくない。こんなのおいしいだなんて。

翌日、仕切り直しという事で再び部員に召集が掛けられた。私は日直であるちこりを置いて先に部室に入ると、既に出水が椅子に座っていた。

「よつすずっちゃん」

「あんた……昨日意識不明の重体で運び出されたんじゃ……」

「んー？ そうだっけ？ にしてもこの部室すげー良い匂いだよね……は？」

「だってこれでもかってくらいにずっちゃんの匂いが染みついているんだよ。もう我慢できなくて4時間目からずっとここに居るんだよ」それってつまり、私の匂いが「ニシン……って事？」

「お、どうしたのずっちゃん」

もう、本当にお嫁に行けない……。

## 五木 一枝の兄貴

異臭騒ぎは収まった。責任は、俺が取った。  
反省文を書いた。

……今はもう、何も思い出したくない。

設立から4日目、我が本部は物語高校で有名な部活となった。  
臭いで。

おかげでこんな部屋を欲しがる生徒はいなくなり、こみみの口車  
によって「私たちはこんな事する程に本気だ」という話が教員たち  
に広まったらしい。おそらく大半は呆れて匙を投げてしまったのだ  
ろうか。とにかく俺たちは、無駄に平穏な放課後を手に入れてしま  
った。

「さて気を取り直して……今日から本格的に活動するから覚悟して  
よね、特に出水！」

同じように俺こと出水と、一枝、ちこり、美靴が向かい合うよう  
椅子に座り、こみみはセンターの位置で小さい身体を目いっぱい動  
かし声を上げる。

「まだ俺はラノベ書く事に納得していないけど」

「……私も……」

「ふん？ 何か言っただちこりん？」

「ええいや、なんでもないよ……」

ちこりが小さくつぶやいた言葉は、どうやら隣にいた俺にしか聞  
こえなかったらしい。彼女が妙にラノベを毛嫌いする事は以前の騒  
ぎで露見したが、その理由は一切明かされてない上に誰も聞こうと  
しない。俺が聞かない理由と大体同じだろう。聞いたって別に意味  
はないからだ。

「みくちゃんは我が本部の名誉雑用係」

「はいー」



「ちこりんとずっちゃんは2視点から評価を下す名誉読者。で、こみみは影から大地を揺るがすムーブメントを作る大編集者。そうしたら後は出水が書くしかないでしょ？」

「俺に選択肢はないのかよ！……いいやとにかく、そこまで俺に書かせようとするのはなら、それなりのサポートなりなんなりはしてくれるんだろ？」

とは言ってみたものの、俺は若干乗り気だった。この機会にラノベを書くのも悪くない。

「もちろん、こみみの仕事そのものですよ」

こみみは陽気に鼻歌を歌いながら部屋の隅に寄せてあったキャリ―付きの黒板を引き、板面をこちらに開かれて見える場所に止めた。「さて、まず投稿するレベルを決めようではないか」

「は？ 普通こう……執筆理論とかそういうのから始めるんじゃないのかよこみみ？」

「ふふん出水、正直ラノベなんかどうって事ないってナメてる節あるでしょ？」

まあ大筋その通りだが

「人気が出るように書くのは楽しいとは思うけど……確かに、俺が書いても大丈夫なんじゃないかって思う作品もくはない」

「そーでしょーそーでしょー。だから今はそんな気持ちで、とりあえず説明を聞きなさいな」

「お、おう……」

「そだそだ。ずっちゃんもこっち来てよ」

「わわ、私も？ なんで」

「一部ならこみみより詳しく説明できるだろうからさ」

「そう……じゃあ出来る範囲で良いなら」

そう言いながら一枝も席を立ち、2人は黒板の両側にそれぞれ立つて話しはじめた。

「小説 とりわけラノベでも執筆そのものは大事。だけど昨今は書く事と同じくらい、レベル選びと書く題材選びが重要になるの

です」

「そんな固定的なものなのかあ？」

少し投槍に訊ねてみると、こみみよりも先に一枝が腕を組んだ格好のまま答えた・

「最王手の《演劇文庫》<sup>えんげき</sup>ならともかく、他の各レベルに焦点を当てるなら題材は自ずと限定されていくわ。例えば《m f m f 文庫》<sup>もふもふ</sup>ならヒロイン描画に重きを置く事。《（げーあー）文庫》なら

それよりももう少し弾けた感じで……その、エロ要素とかがあると良いつて言われてる。あとその年に流行ったものにも影響されるかな。もちろん被らない方向でね。例外はどこにでもあるけど、実力が他人に認められない内はまず書く事だけど考えた方が適切よ」

一枝が語る一方で、こみみは黒板に挙げられたレベルの名前を書き並べる。俺と美靴はただ話を聞いてふんふんと頷いていたが、終始ちこりは不機嫌そうな顔のまま机の上をじつと眺めているようだった。

「……で、大体こんな感じに審査がされて、賞を与えられたのち口になつてくのがおおよそのところ。分かった出水？」

その後、こみみの割と真面目な話が10分ほど続いた。各レベルの細やかな説明から、ヒットする作品の題材、王道とありきたりの違いなど、思いのほか聴衆にも気力を求めるような深い内容だった。最初は面を食らったような気分ではあったが、時間と共に俺はただ話に聞き入っていた。

……それが何故お馬さんごっこに発展しているかの意味が解らない！

「こういう事だよ出水！」

「説明つてのは分かるように話すことだろうが！」

「いいかい馬！ 今は演劇の独壇場と言っても過言ではないのだよ。各レベルはそれぞれの特色を出すくらいでしか対抗できないくらいに規模が違うし、澄川系列以外で対抗できるのはたぶんm f m f

文庫くらいなの！ お姉ちゃんだってがんばってるのにー！！」

「あうえつと……」

「「？」」

急に変な声を漏らしたちこりに全員の視線が集まる。

「どしたちこり？」

俺が訊ねると、彼女は少し口をすばませてから小さく

「ちよつと……今日家の用事があるから、帰っても良い……？」

「おー。用事あるならしょうがないよ。いつてらーっしやーい」

わざとなのか、人の表情をまったく伺おうとしないこみみは真っ直ぐ元気な声で彼女に返事し、そして送り出す。鞆を持ったちこりは小走りに戸の方へと移動してから振り返る。

「えと……その、いつてきます」

会議はしばらくもしない内にグダグダとなった。というか、机を壁際に寄せた時点で続行なんか無理だったんだ。こみみは俺を馬にしたまま動かないし、何を思ったのか美靴まで乗っかり始めようとする。そんな所を見て呆れたのか、一枝は鞆を持って部室の戸を開いた。

俺は乗っかってきた2人を勢いで無理矢理剥がして彼女を追い、そしてこの校門外に至る。

「なんであんたが付いて来るわけ？」

「んや……それでもしないとあの状況から抜け出せられなかったし」

「あら、女の子に馬乗りにされて喜んでるものとはかり」

「俺にどういうキャラを付けたいんだよー……」

駅までの短い距離を、自然にふたり並んで歩く。

「ねえ、あんた本当に書く気あるの？」

ポニーテールを横に振って、一枝が一瞥しつつ俺に訊ねる。その瞬間、ふわりと風にあおらせたシニールストレミング とは違う彼女本来の香りが鼻をくすぐった。

「え、あ……まあ、やらないよりはやってみようかな程度には思ってるよ。それに本気でがんばってるこみみを裏切りたくないし、ちこだってみくとの仲を……」

「でもちこ本人は途中で帰っちゃったんだよ？ みんなを置いて。やつぱり前の騒ぎも踏まえると……ラノベを作るって事自体に消極的なんだと思うよ」

「ずつちゃんに興味なさげなのに、割とノリノリだったな」

「私はその、えと……」

会話に割り込むようにして、白い車がクラクションを鳴らして歩道へ寄せてきた。まず一枝が足を止めると、俺もつられるようにして歩を止める。すぐに車の窓が開かれると、中から茶髪の男性が顔を出してきた。

「一枝ー学校終わったのか？」

「わざとらし……兄貴、ずっと私が校門出るまで待ってたっての？」

仕事サボんな」

「サボってないよお、今日はずっと原稿読んでたし」

その呼び方から、彼は一枝の兄であると言うのはすぐ分かった……が、見た目はかなり年が離れているように見えるせいで、まだ少し疑わしい。こんなに濃い目のクマは初めて見た。

「んで……そこにいる君は誰なんだい？」

ついに茶髪の男性が俺に話しかけてきた。変に隠してもしようがないので手短に答える。

「ずつち……いや、こほん。一枝さんと同学年の常葉 出水です」

「何で一緒に帰ってるのかな」

「同じ部の部員なんで……重なっただけです」

「ほう、それじゃあ」

なんで事情聴取みたいになってるんだ？ なんだか穏やかな感じがしない。

「ったくバカ兄貴、こんな所に停めてたら他に迷惑でしょうが。で、迎えに来てくれたのか冷やかしに来たのか、はつきりしてよね」

「あはは、そうだったな。夜の会議まで時間があるから家に帰るつもりだったんだよ。せっかくだから2人とも乗って乗って」

言われるまま後部座席に乗る。一枝は助手席に鞆を放り投げると、俺の隣に来るように後部座席へ座った。

「常葉くん、君の家はどの辺なんだい？」

「あつちの駅方面にまつすぐ……自宅まで遠回りになるようだった降りますよ？」

「いやいや遠慮しないで、いろいろ聞きたい事があるんだから」

と、いかにも「他意はないよ」と言わんばかりの笑顔で言うものだから余計に怖い。一枝の兄ならもう少し生真面目な人かと思っていたのにこれだ。

「そうだ、すっかり自己紹介するのを忘れていたよ。俺は五木<sup>いっき</sup> 一<sup>かず</sup>馬<sup>ま</sup>。妹の一枝がお世話になってます」

「いいえ、こちらこそ……」

……この場で一枝が否定せず黙っているから、兄妹なのは本当なんだろう。でもいい加減この空気感だけは何とかして欲しい。緊張とも倦怠ともつかぬ不安定な……。

「ところで常葉くん。一体何の部活をやってるんだい？」

「ちよつとバカ兄貴！ そういう事聞くの止めてって言ったでしょ！？」

「今は常葉くんに聞いてるからね」

一枝は兄 五木さんに何も話していないのか。彼女がわざとそうしているなら言わないで置く方が気が利いてる……だけど、今は反応が読めない五木さんの方が怖い。

「ぶ、部活の名前は本部って言うんですけど、実際はライトノベルを考えたり書いたりする部なんです。まだ駆け出しって程にも活動は進んでいないけど……」

「へえーラノベ作りかぁ。いいね、そういうの」

思ったよりもずつと軽い反応。てつきりラノベなんてオタクくさいものを作るのに、うちの妹を巻き込みやがって！ と言いながら

シガーソケットを押し当ててくるのかとばかり。

「五木さんも小説とか　ラノベとか読んだりするんですか？」

「まあね。でも俺は面白いものだったらなんでも吸収したいからね。選り好みはしないよ」

学校の前を出て数分。最初はこのように自然な会話が流れていたが、次第に言葉は連続性のないキャッチボールになり、家に着く直前にはまったくの無言状態になってしまった。

「この辺で良いかな？」

「ええ、俺ん家すぐそこにあるんで」

車が止まると、気まずさから逃れようとすぐにドアを開き、鞆を持って車を降りる。

空は綺麗な夕焼けに染まっていた。いつもはもっと早く帰ってきているだけに、路上から見るこの色彩は俺の目に目新しく映った。

……と外の空気を満喫する前に、一言くらい挨拶しないと後味が悪い。

「わざわざ送ってもらってありがとうございました」

「いやいや、我が妹の大事な友達だから遠慮はいらないよ」

「いえいえ……では、これで」

「ちよつと待つて常葉くん」

適当な区切りと思ったタイミングを、彼は綺麗に吹き飛ばしてくれた。ここまで来ると少しイラッとすら来る。

「なん……ですか？」

何を追撃するように聞かれるのかと恐れながら振り返ると

「君が本部でライトノベルを書く人になってるんだよね？」

「え、なんでその事を……本部の部員以外は知らないはずなのに」「昨日一枝が言ってきたんだよ。友達の男子が賞を目指してライトノベルを書く事になったから、そのアドバイスとか出来ないのかってね」

「友達……ずつちゃん？」

立ち姿勢から少し腰を落として後部座席の一枝を覗くと、クツと

目を見開いている彼女の姿が目に入った。

「は、ば、バカ何直接言ってるのよ！ あほ、ナス！！」

「別に他言禁止とは言われてないし？ 俺は単純に、その男子っていうのが彼だと推理しただけなんだけどなあ」

「ほんとにムカつくクソ兄貴……こら出水！ いつまでそこに突っ立ってるつもり！？」

「お、おう」

言われてみれば確かに路上の真ん中に立ったままだ。車の通りが少ないとはいえ、いつまでもここに居る訳にはいかない。

「ま、そういう事だよ常葉くん。とりあえず自分の力でがんばってみなよ」

「そうですか……わかりました」

「それじゃ、今後もよろしくね」

そこで五木さんは窓を閉じ、僕が家の前まで歩くのを見送ってから車を出した。

俺が何となく車の走り去る姿を眺めていたら、100メートル程先に行った場所で変なクラクションを鳴らし始めた。……中でどんな乱闘が起きているのか、想像は出来ない。

## 常葉 出水の駄作

「つまらん。お前の話はつまらん」

「そういうネタはいいから真面目に答えてくれこみみ」

「本当につまらない」

「……え？」

ちょうど雨の日の事でした。わたしはコピーされた30枚の原稿を手に持ちながら眉をひそめていると、こみちゃんが威圧するような大声でそう言ったのです。

「なあちこ、お前は全部読んだか？」

出水くんは糸目をいつもより細めて訊ねて来ます。わたしは目のサインで「まだ読み切っていない」と答えると、再び彼はこみちゃんの方を向きました。

「いや、あのさ、全部読んだ本当に？」

1ページ目に書かれたタイトルは《雨傘》、その下には作者の名前として常葉 出水と書かれています。彼は自宅のパソコンで文章を打ち込み、原稿を3日で完成させたらしいのです。

「当たり前でしょ？ ちゃんと批判するなら、批判する人間も責任は持つものよ」

こみちゃんは原稿をぼんと机の上に置く。そして腕を組んでからため息をつく、横目で一枝ちゃんに問いかけました。

「出水はこみみの事どうしても信じてくれないみたいだよつちゃん」

「だってみくは面白って言うてくれたんだぞ？」

出水くんは必死に自分を弁護する。最初はなかなか自信満々に原稿を出した上、一番最初に読み切ったみくちゃんは確かに面白いと笑顔で言っていた。

……だけどその期待が余計に、この落胆を大きくしている気がしてなりません。



「うーん……つまらないってのはもうこみみが言ってるから良いんだけど」

「ずっちゃんまで前提かよ！」

「短編にしたって期待を下回り過ぎよ。主人公が目覚めると隣に女の子がいた。もうこの時点で読み止めていいなら止めてるよ」

「な、何でだよ……」

「これは執筆や構成よりも心理現象なんだけど……朝主人公が目覚める所から始まる小説って、内容そのものが作者の願望になってるの。詳しい内容は省くけど、大体その系統の話ってよほど人生経験がある作者じゃないと、妄想にまみれた面白くもない私小説にしかないの」

うーん……これが出水くんの願望なのかは知らないけど……主人公が朝目覚めると、同じベットに女の子が寝ていた。その女の子は今日から家に住む同居人だけど、伯父さんがそのことを主人公に話さず勝手に決めた……って所から物語が始まってます。

「……解った、とりあえず面白くはないのは認める。でもどうつまらないんだよ」

さすがに少しいじけたような声色で出水くんが訊ねると、こみちさんはもう一度原稿を手にとってからパラパラ捲りつつ語り始めました。

「まー導入はともかくね……一緒に住むことになった女の子と中学校へ登校すると、親友の大和くんとその友達である茅野原ちゃんに会う。こっからのストーリーがめちゃくちゃよ」

「ど、どう滅茶苦茶なんだよ」

「聞いてばかりも良くないと思うよこみみは？ んーとね……部活動同士がある条件で強く対抗しているってのは良い素材だとは思うけどさ、なんで天文部の活動と軽音部の活動を一緒にたに扱ってるの？ どっちを描きたいの？ どっちを推したいの？」

「いや……どっちも……」

「そのどっちつかずが読者にとってストレスなの。しかもストーリー

ーのオチが意味不明。実は最初にベッドへ入ってきた子は双子の妹で、最初から主人公を兄だと知って生活していた？　んで倒れた母親が病床から回復したから主人公に黙って帰るけど、そこで主人公が真実を知って駅で引き止める、妹はそこで主人公に抱きついて謝る。読者ナメてるの？」

「いやそこはさ、駅のホームにある駅員用のマイクを使って引き止めるのがポイントで」

「あのねえ……そういうアクションを本位でやるならそれに向かって、状況や人間関係を本位でやるならそれに向かって、って焦点を合わせないと一貫性が出ないの。解る？」

「……ああ、何となく……」

次第に可哀そうなほどに声の威勢が無くなっていく出水くん。こみちゃんの説教が終わるタイミングで読み終わったわたしも、彼女の言葉とほぼ相違ない感想です。

「……でも、すごいと思います！」

彼の落ち込みで空気感まで沈んでしまった中、原稿を両手で持ったままのみくちゃんは顔を上げて言いました。

「確かにみんなにはウケなかったかもしれないけど、たった3日でこれだけの量を書けるってだけでも凄いんじゃないかな？」

「み、みく……！」

少し元気を取り戻した出水くんを浮かせまいと、一枝ちゃんはすかさずつつこみます。

「まー……確かに比較的には速い方かもね。でもクオリティが追いついてなければ意味ない」「はあ……」

「でも、武器にはなり得るかもね」

「え？」

「大概の人間は書き切る前に挫折するの。あれがダメだこれがダメだって言うループに入り込んで、苦しみの原因が分からないとついに投げ出しちゃうの。その点あんたはここまで書き切った、付いてないけどオチは付けた。花は咲かなかったけど、種を植えて葉っぱ

を生やすまでは出来たって事。だから無駄に落ち込む事はないわ」

「そうなのかつ!？」

「でも今後の課題は、今積もりに積もってる勘違いをいかに経験量で変えていくか、だね。凡人の凡人による地道な努力ってやつよ」

「えー……褒めてくれたってのにそれかよ」

「褒めてないよっ!!!」

こみちゃんと一枝ちゃんはほぼ同時に彼に向かい言いつけました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2682z/>

---

クーゲルシュライバー！

2012年1月13日22時50分発行